付篇Ⅰ

第１章　吉田遺跡第Ⅰ地区Ｅ区の調査

１　調査の概要

吉田遺跡第Ⅰ地区Ｅ区は、吉田構内の中央部からやや北に位置し、現在では第２学生食堂及びその前面の道路となっている。今は構内造成により見る影もないが、当時の地形図と写真（PL.37）によれば、姫山の北から南にのびる支脈である通称「もり山」の南先端、標高24～23ｍの緩傾斜面である。調査前の状況は、この緩傾斜面が開墾により段状をなし、崖面に包含層が露出していたようである。Ｅ区はこの段の上側に設定されている。

Ｅ区調査の経緯は、吉田調査団が発行したガリ版刷りの『山口大学構内第Ⅰ地区Ｅ区発掘調査概報』によれば以下のように記述されている[1]。「山口市大字吉田所在の山口大学構内にある第Ⅰ地区のＥ区において、学生食堂の建設にあたり、予定地区の1,000㎡につき、昭和46年９月８日から５日間にわたってトレンチを設け、予察調査を行った。その結果、弥生時代から古墳時代をへて中世にかけての住居跡とみられる遺構の一部を検出した。昭和46年10月16日から11月21日までの21日間、山口大学吉田遺跡調査団は、山口県教育委員会の協力と山口大学文化会考古学部の助力を得て発掘調査を実施した。」

現在、埋蔵文化財資料館にはＥ区に関連した図面が42葉残されている。また、試掘調査と本調査に関する調査日誌が、それぞれ１冊ずつ合計２冊残されている。調査日誌によれば、まず昭和46年８月24日にボーリングステッキによるＥ区の土層調査が行われている。この結果を受け、それぞれが平行するａ～ｇまでの７箇所トレンチを設定し、昭和46年９月８日から15日にかけて試掘調査が行われている。トレンチは９月８日に第２学生食堂建設予定地内に、ｃ・ｄ・ｅの３本が設定されている。９日には第２学生食堂前道路予定地にａ・ｂの２本が設定された。11日にはｆ・ｇの２本が設定されている。このうち、包含層及び遺構分布密度の高かったのが、

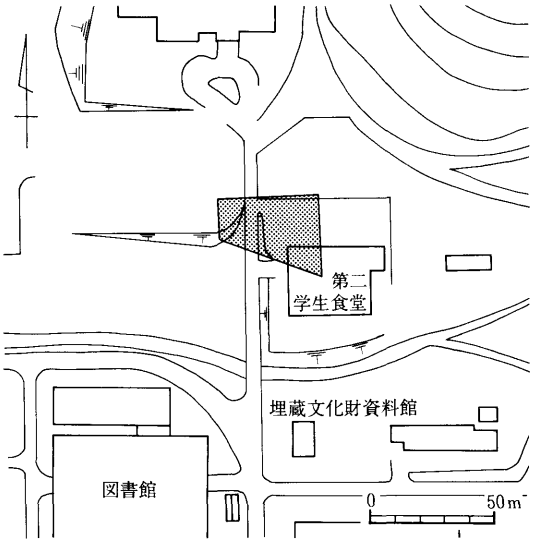


Fig. 67　調査区位置図

ａ・ｂ・ｃのトレンチであったらしく、この３本のトレンチが拡張されてＥ区が設定されている。ここで注意せねばならないことは、包含層の分布密度によって設定されたＥ区の範囲は、従来いわれてきた第２学生食堂ではなく、第２学生食堂の一部分も含むが、その前面の道路が大部分なのである。第２学生食堂部分の調査については、追加調査として記録図面のみが埋蔵文化財資料館に保管されている。遺物の所在は現在不明であり、図面のみ付篇の第２章で報告を行う。

なお、原図は山口大学吉田遺跡調査団が当時記録したものであるが、今回の掲載にあたっては埋蔵文化財資料館が新たにトレースしたものを使用した。

2　層位

現在、埋蔵文化財資料館が収蔵するＥ区に関する42葉の図面には、土層断面図が含まれていない。試掘調査の日誌の記述から、層の厚さや深さは判然としないが基本層序を以下のように復原することができる。

第Ⅰ層：褐色土（表土）、第Ⅱ層：暗青灰色土（旧水田耕土）、第Ⅲ層：淡暗褐色土（包含層）、第Ⅳ層：黄褐色土（地山）

第Ⅳ層の地山上面を遺構検出面とするが、その上部に堆積した第Ⅲ層の包含層は部分的にしか確認されていない。これと同様なデーターは、Ｅ区に接する大学会館前庭部（当時は大学会館新営予定地）の試掘調査[2)]でも認められており、本丘陵の耕作による削平は著しいものであったと推定される。

3　遺構・遺物

第Ⅰ地区Ｅ区は「調査の概要」でも述べたように試掘トレンチを拡張して設定された、東西約40ｍ、南北約20ｍの長方形の調査区で約800m^2の面積を測る。段状に開墾を受けた緩傾斜面であるため、段状の崖面近くでは遺構の残存状態が劣悪である。

検出された主な遺構には、竪穴住居跡と溝状遺構がある（Fig.68）。『山口大学構内第Ⅰ地区Ｅ区発掘調査概報』は、６棟の竪穴住居跡を報告するが、うち１棟は竪穴住居跡としての根拠に薄い検出状態である。出土遺物からは、中世遺構の可能性が高い。残りの５棟の竪穴住居跡はいずれも方形のプランをもち、出土土器から古墳時代中期の年代が与えられる。調査区の東側で検出された溝状遺構は、出土土器から奈良時代末～平安時代前期に機能していたと考えられる。丘陵の傾斜に沿って北から南への流路方向をもつ逆台形の溝で、底面には小穴が一定の間隔をもって連なっていた。この他、時期不詳の遺構として、多数の柱穴、土壙２基がある。柱穴の分布は、上述の溝状遺構から西側で密になるが、その関連は判然としなかった。

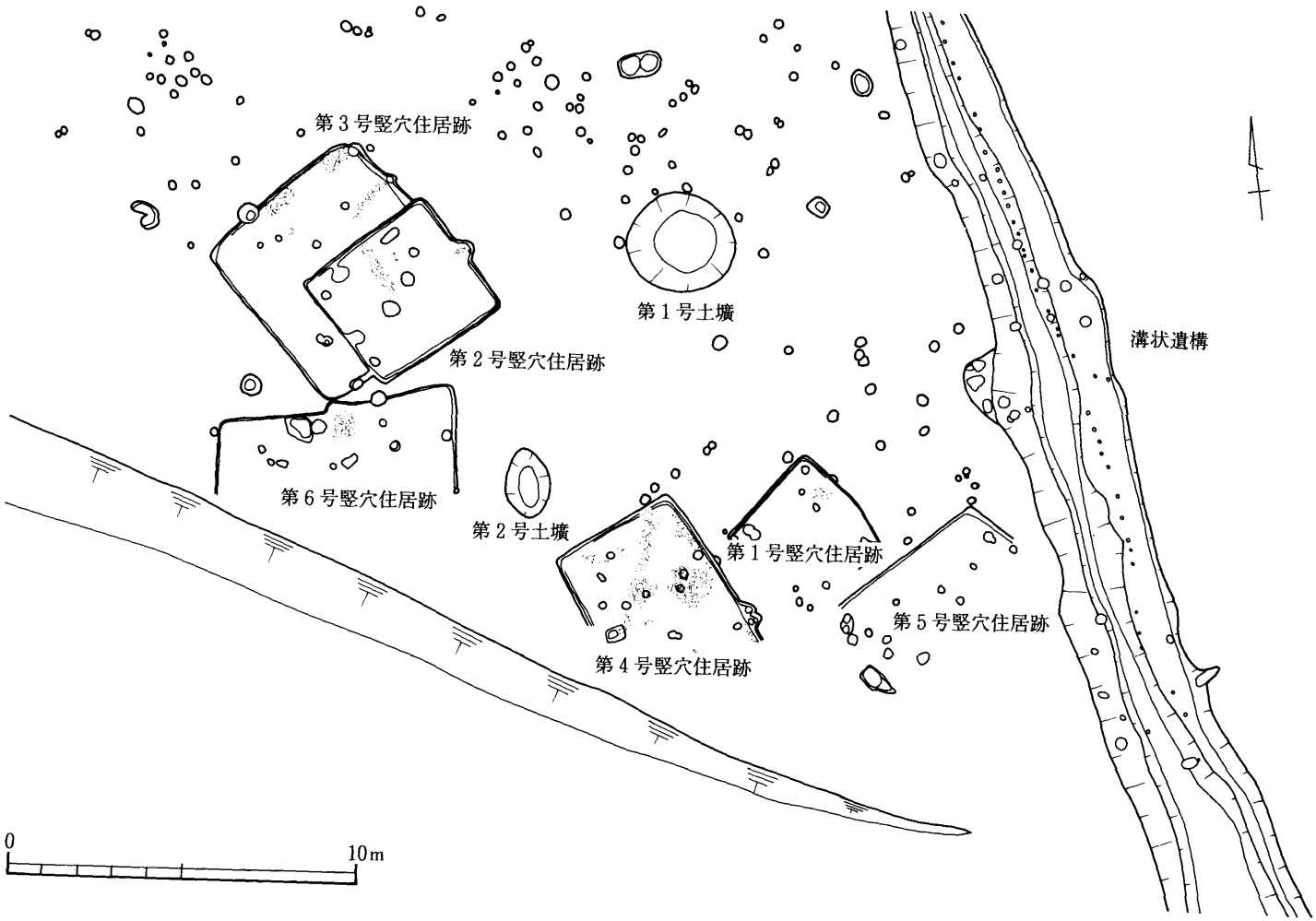

第3号竪穴住居跡
第1号土壙
第2号竪穴住居跡
溝状遺構
第6号竪穴住居跡
第2号土壙
第1号竪穴住居跡
第5号竪穴住居跡
第4号竪穴住居跡
0
10m

Fig. 68 遺構配置図

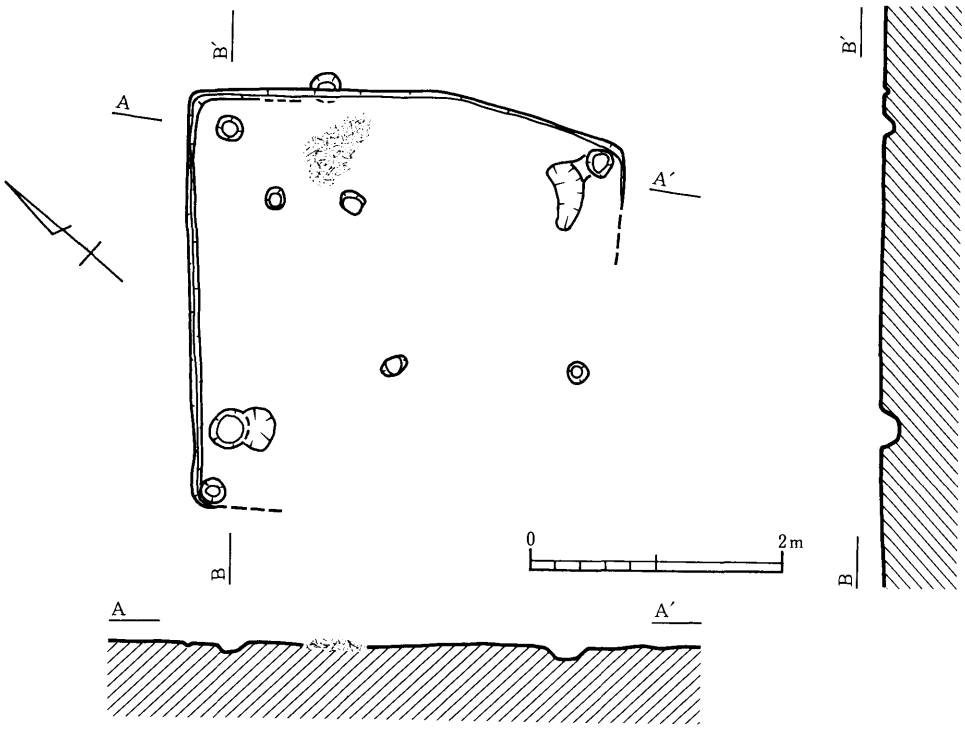


Fig. 69　第１号竪穴住居跡実測図　　（標高は不明）

(1)　竪穴住居跡

概報及び図面によれば、第Ⅰ地区Ｅ区からは６棟の竪穴住居跡が検出されている。このうち第２号竪穴住居跡については、「山口県下最古の造り付けのかまど」を設けた竪穴住居跡として報告され、吉田遺跡の主要遺構の一つとなっている。しかし、竪穴住居跡の年代については概報に「古墳時代前半期」と記述されるのみで、竪穴住居跡の年代を推定するうえで必要な遺物は現在まで未報告である。今回、既に報告済みの遺構とともに、未報告である遺物を報告する。

第１号竪穴住居跡（Fig.69）

第Ⅰ地区Ｅ区は緩斜面に位置し調査当時は雑草地であったが、それ以前は耕地として利用されていたらしく、斜面等高線の頂部にあたる調査区の南側が段状にカットされ崖面を呈していたようである。第１号竪穴住居跡はこの崖面に近い調査区の東南に位置し、第４号竪穴住居跡の東側に、第５号竪穴住居跡の北側に隣接する。平面形態は方形を呈するが、耕作のため削平を受け、さらに崖に面した南辺と西辺および南隅は土砂の流失が激しく検出されていない。住居跡の残存箇所はそれぞれ北辺約3.2ｍ、東辺約3.4ｍを測り、推定床

面積は約10.9㎡の規模である。

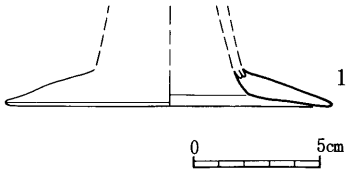


Fig. 70 第1号竪穴住居跡出土土器実測図

削平のため住居跡の残存状態が極めて悪く、遺構検出面と床面はほぼ同一である。概報には「柱穴は住居址の内に10個、住居址外に4個、計14個を検出したが、それらの位置と太さや深さなどから推して、3個がこの住居址のものと考えられる。」と記述される。原図では住居跡内に10個、南隅付近に4個、住居跡東辺に切られて1個及び外側に4個の柱穴が記録されている。断面図より、おそらく南隅を除く3隅に近接して検出された、直径20cm前後、深さ約10cmの柱穴を指すと考えられる。確かに、直径・深さに共通性があり妥当かとも思われるが、周壁に寄りすぎているきらいがないわけではない。柱穴の出土遺物から推定する方法もあると思われるが、本住居跡を含むE区の柱穴出土遺物は、埋蔵文化財資料館に全く残っていない。壁溝は北辺及び東辺北端で検出され、最も残りのよい部分で上面幅5cm、下面幅2cm、深さ4cm前後と浅い。柱穴及び壁溝の深さは極めて浅く、削平の激しさを物語っている。

東壁の中央からやや北側によった位置で、壁より約10cmばかり内側に、長軸66cm、短軸38cmの平面楕円形を呈した、厚さ3cmばかりの焼土面がある。削平が著しいために、上部に構築物を有していたかは定かではない。遺構平面図には焼土中に土器片が、実測されている。

第1号竪穴住居跡出土遺物（Fig.70, PL.39）

第1号竪穴住居跡の出土遺物に関して、概報には「この住居址の床面から、黄橙色で、胎土が脆くて磨滅している土師器の破片を4片検出したが、いずれも実測が不可能な類である。」とある。埋蔵文化財資料館の収蔵品で、第1号竪穴住居跡出土遺物と確認しえたのは数個の小片がつまった小袋が10袋であり、概報の記述を裏付けるものである。そのうち唯一実測が可能であったのが、1の土師器高坏脚部片である。復元脚裾部径13.0cm。色調は淡赤褐色を呈する。内外面ともに風化が著しい。色調・風化の具合から2次焼成を受けた可能性が強い。この破片を収納していたポリ袋には、焼土中との注記があり、遺物観察の所見と一致する。埋土ではなく焼土中という出土地点から、第1号竪穴住居に本来的に伴う遺物であったと考えたい。遺構平面図に描かれた土器片と、同一であるかは不明。

この土師器高坏脚部片から、本住居跡の時期を推定するならば、古墳時代中期前半の年代が与えられる。

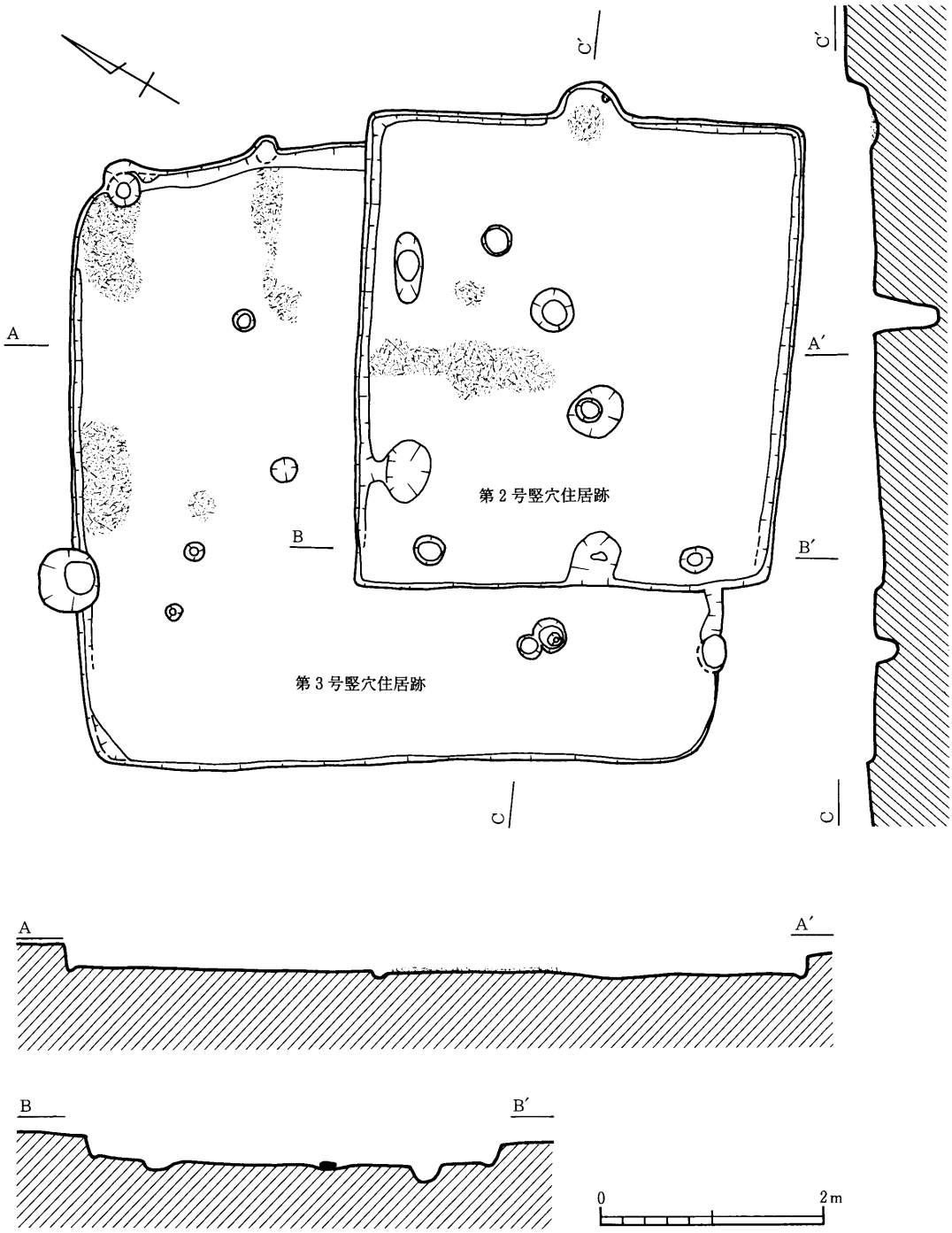


Fig. 71 第2・3号竪穴住居跡実測図　　（標高は不明）

第2号竪穴住居跡（Fig.71, PL.38）

第1号竪穴住居跡の北西約10mの地点にあり、重複する第3号竪穴住居跡と共に第6号竪穴住居跡の北に隣接する。第3号竪穴住居跡のほぼ南半分を切り込んでいる。平面形態は整った方形で、北辺約4.2m、南辺約4.0m、東辺約3.9m、西辺約3.7m、床面積約15.6㎡の規模をもつ。

残存状態は比較的良好で、遺構検出面からの周壁は深さ約30cmを測る。東壁中央部付近には、直径約30cmの半円形の浅く掘り込まれた張り出し部がある。この部分には焼土が充塡しており、概報が「山口県下最古の造り付けのかまど」と記述している。削平のため、上部構造は不明であるが、竈と見なすことに間違いはない。山口県下では現在までに、本例よりも時期の遡る竈が検出されているが、比較的古く位置づけられるものである。この他に、北壁内側の中央付近には、長軸150cm、短軸50cmの平面長楕円形を呈した、厚さ約5cmの焼土がある。概報では「これは室内の炉と考えられる。」と記述している。住居跡の1壁面側と中央に焼土面をもつ構造は、保存地区第13号竪穴住居跡でも確認されている。

壁面直下には幅10cm、深さ3cm内外の周溝が、西壁と東壁の炉部分以外に巡らされている。なお、東壁の炉部分と対称の西壁内側の中央に掘りくぼめられた箇所があり、すり石が置かれていた。概報によれば床面は「中央部近くから南西壁部にかけてわずかに低く、この部分に黒褐色土層がたたきしめられた状態で残っていた」という。貼り床であろうか。

柱穴に関しては概報によれば「住居址の内部から直径30から40cm、深さ20～60cmの柱穴を6個検出しているが、位置・深さ・傾きなどから1と2がこの住居址に伴うものとみてよいであろう。」と記述される。西壁内側の両端にある柱穴を示すのであろうが、両者とも床面からの深さが20cmにも満たず疑問の余地が残されている。

第3号竪穴住居跡（Fig.71）

第2号竪穴住居跡に北東壁と南東壁の大部分を切り込まれている。平面形態は方形を呈するが、北辺約5.4m、西辺約5.0mを測り、推定床面積約27.0㎡の規模である。

床面は切り込んだ第2号竪穴住居跡より高く、遺構検出面より深さ20～25cmを測る。北壁と東壁の壁面直下には、幅10cm、深さ5cm内外の断面U字形をした周溝が掘られている。北壁中央付近に接して、半径50cm前後の半円形の焼土が認められる。

柱穴に関しては概報によれば「住居址の内部から直径20～30cm、深さ10cm前後の柱穴を9個、その周辺から直径・深さとも20～30cm内外の柱穴8個、計17個の柱穴を検出したが、重複しているので、どれがこの住居址のものかを指摘することが困難である。」とある。

第2号竪穴住居跡出土遺物（Fig.72, PL.39）

第2号竪穴住居跡は、第3号竪穴住居跡を切り込んで建築されている。当然のことながら後者よりも前者が新しいわけであるが、新しく掘り込まれた第2号竪穴住居跡は第3号竪穴住居跡の出土遺物を混入させている可能性がある。

2は二重口縁壺頸部である。やや開き気味に直立する頸部をもつ。口縁部は水平方向への屈曲部のわずかな部分を残すが、大半の部分を欠損する。風化しているが口縁屈曲部と頸部に強いヨコナデのあとを残す。3は底部である。破片が小さく、風化も著しいため、器形を推定することは不可能である。ややくぼんだ底部は、径2.6cmと底面が小さい。4・5・6は高坏である。4は坏部の破片。口縁への立ち上がり部分全てを欠いている。脚部との接合痕を明瞭に残す。中空の脚部に押し当てられた、坏部側の接合部は円盤充塡状に盛り上がる。風化が著しい。5・6は脚部の破片。5は床面出土の注記をもち、住居跡に伴うのが確実なものである。薄手の器壁で、中空の脚部。裾部は強く屈曲し、内面に稜をもつ。風化が著しい。胎土には、赤色斑粒を混じえる。6は坏部との基部はすぼまるが、裾部は屈曲をもって大きく開く形態である。風化が著しい。

7はすり石である。外面には使用による条線が観察できるが、全体的には光沢をもつ。先端部分は、敲打により摩滅している。8は鉄製品である。断片であるとともに、錆がひどく原形を推定することは困難である。端部が折り曲げられていることにより、方形板状の耕具刀先と判断した。

高坏脚部の形態などから、古墳時代中期前半の年代が与えられる。第1号竪穴住居跡と方向や炉の位置が同じであり同時期の可能性があり、出土遺物からも矛盾はない。

第3号竪穴住居跡出土遺物（Fig.73, PL.40）

9は壺頸部片である。口縁端部を欠損するが、口縁部の開いた広口の形態をとるものと考えられる。肩部も開きが強く、胴部は張りを持つと考えられる。頸部の最も締まった部位で、復元径11.0cmを測る。風化は著しいが、破片は大きい。包含層の上部より出土しており、第3号竪穴住居跡に本来伴ったものであるか定かではない。10は壺あるいは鉢底部片である。ほとんど丸底化しているが、胴部よりやや突出した部位で径5.0cmを測る。胎土は精製粘土である。風化が著しい。「土器④」の注記があり、床面出土遺物の可能性がある。11は山陰系甕である。口縁の屈曲部が突出する。風化が著しい。混入遺物の可能性が高い。12は小型器台である。坏部は剥離して、欠損する。脚部の裾部も欠損する。坏部内面中心にハケ工具痕がある。13は鉢である。口縁端部は摩耗している。底部は径4.6

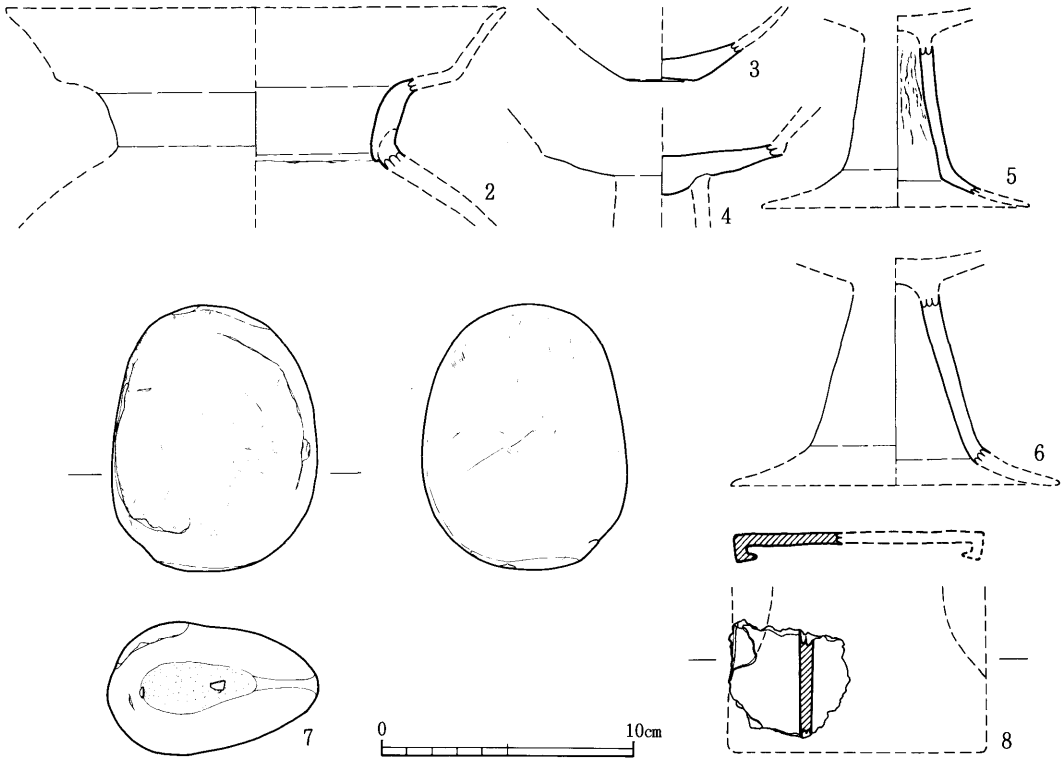


Fig. 72　第2号竪穴住居跡出土遺物実測図

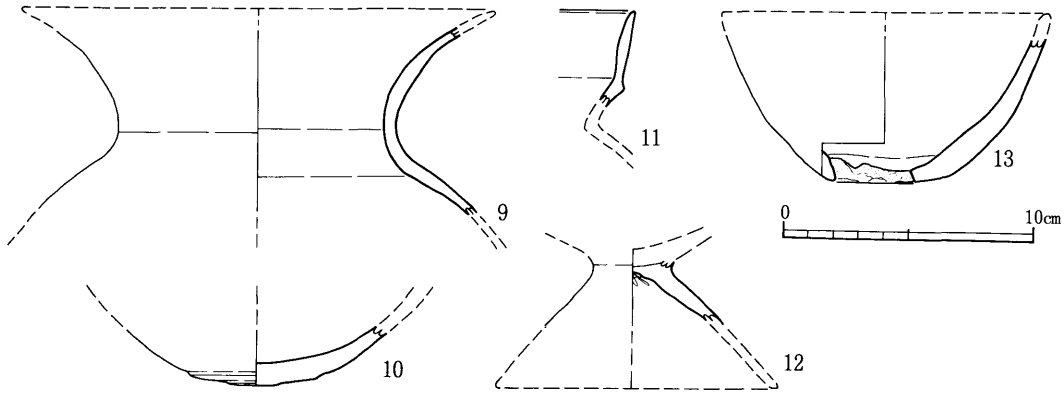


Fig. 73　第3号竪穴住居跡出土遺物実測図

cmを測り、その底面は焼成後に穿孔されたと考えられる。胎土は精製粘土に石英角粒を混じえる。床面出土遺物である。

時期判定に有効な器種は出土していないが、住居跡の切り合い関係から第2号竪穴住居跡出土遺物よりは前と考えられる。

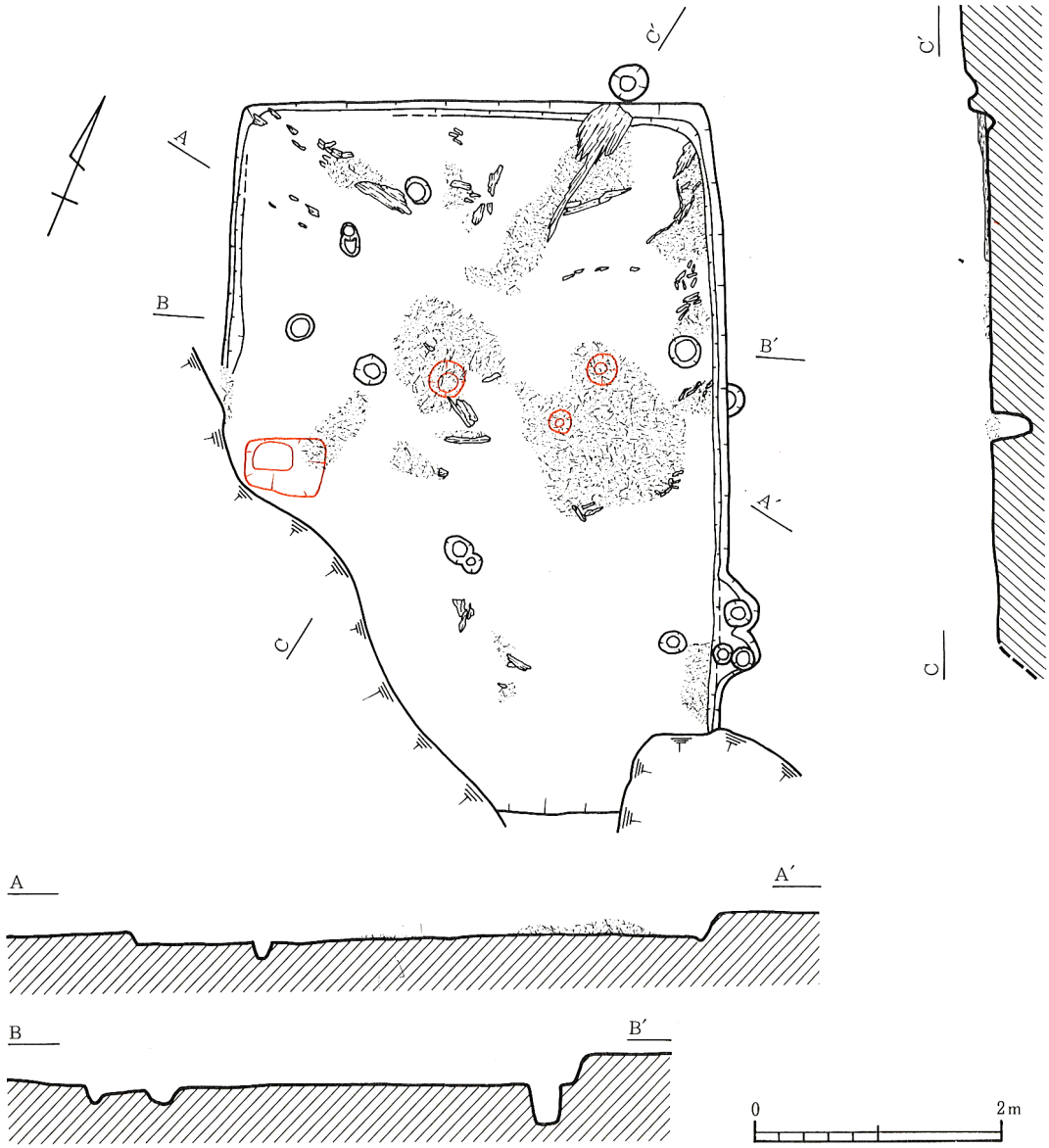


Fig. 74　第4号竪穴住居跡実測図　　（標高は不明）

第4号竪穴住居跡（Fig.74）

第1号竪穴住居跡の西側に隣接する。段状にカットされた崖面に近く、これに面した南壁と西壁の半分が流失してしまっている。平面形態は長方形を呈すると考えられ、長辺にあたる東壁は約5.6m、短辺にあたる北壁は約3.8mを測り、推定床面積は約21.3m²の規模である。床面は検出面より、深さ約25cmを測る。壁面直下に幅約15cm、深さ15cm前後の断

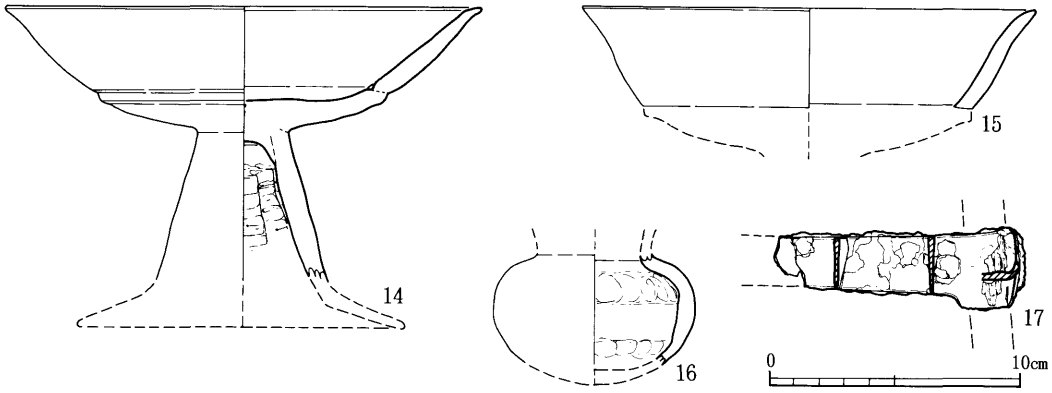


Fig. 75 第4号竪穴住居跡出土遺物実測図

面U字形の周溝が巡る。

概報には「床一面に焼土や炭化物があり、火災を受けた様相を呈していた。」とある。図面にも北壁から床面中央にかけて、横倒しになった炭化材の表現がなされている。ただし、遺存状態はあまり良くなく、上部構造を復原するにまでは至らない。本住居跡は、北壁にも東壁にも焼土面は確認されず、竈の施設は持たないものと推察される。西壁の中央付近で、壁から約10cmばかり内側に長辺約60cm、短辺約30cmの長方形の土壙がある。

柱穴に関しては、「住居址やその付近から直径20～30cm、深さ20～40cm前後の柱穴が7個検出されたが、一棟の家屋の柱穴としての組み合せはできなかった。」と報告される。確かに図面からも上部構造を支えうるような柱穴の並びは確認できなかった。

第4号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.75, PL.40)

14・15は高坏である。14は坏部・脚部ともに全体の1／2を欠損するが、脚裾部を除いて図上復元が可能である。復元口径18.8cm。坏部は屈曲して、口縁部へと移行する。外面屈曲部は強くなでられ、突起状になる。口縁部は、外方に開き、端部はヨコナデによって面をもって屈曲する。脚部内面には、反時計まわりのケズリが施されている。なお、坏部と脚部の接合部分には、脚部内側から粘土が貼りたされる。15は口縁部片である。内外面とも風化が著しい。14とは口縁部の長さ、口縁端部の形状から区別したが、同一個体の可能性もある。16はミニチュア壺である。復元で最大胴径8.0cmを測る。内側に指頭圧痕がある。山口市西遺跡[4]などの類例から、直口の形態になると考えられる。

17は鉄鎌である。長方形を呈する鉄板の一短辺を直角に折り返して製品にしており、直刃直角鎌と呼ばれるものに属する。木柄着装部分に、木質の痕跡が残っている。先端は欠損するため、どのような形状であるかは不明。現存長約10.0cm、刃部幅約2.0cm、刃部厚さ約2.5mm。

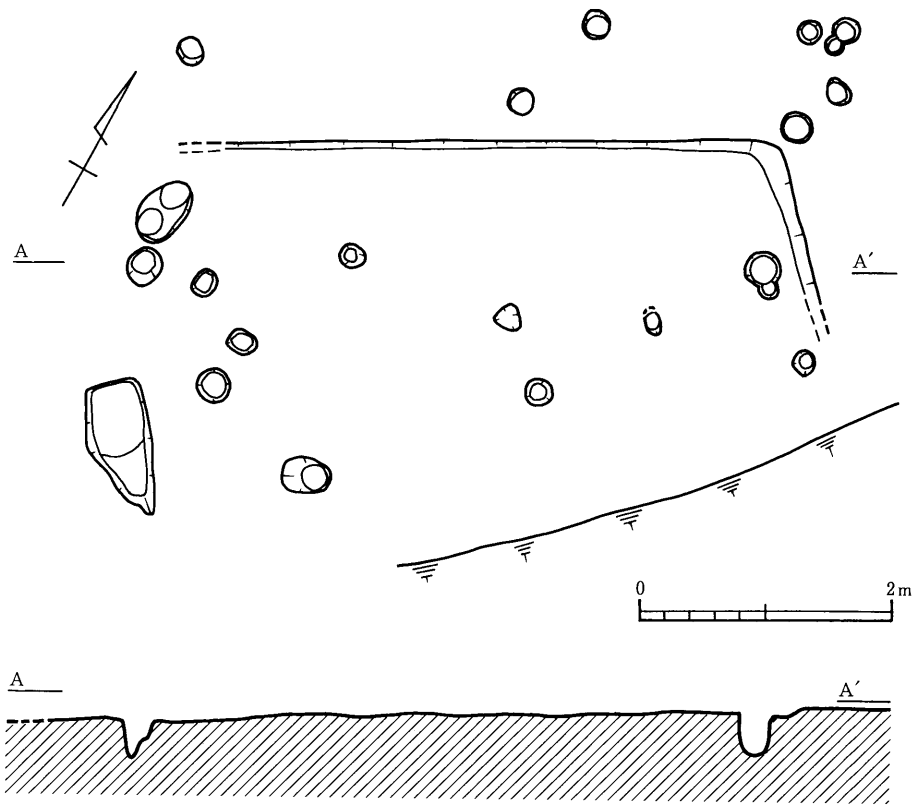


Fig. 76　第5号竪穴住居跡実測図　　（標高は不明）

第5号竪穴住居跡（Fig.76）

第5号竪穴住居跡に関して概報には、「第1号住居址の東に接したこの竪穴住居址は、削剥されて西北壁と東北壁の一部を残しているにすぎないので、全体のプランをつかむことができなかった。なお、住居址やその周辺には、直径・深さともに20cmから30cmばかりの柱穴を23個検出しているが、どれがこの住居址のものか指摘することができない。」と報告されている。概報の記述通りに住居跡とするならば、崖面に近い南側の土砂を流失しているため、検出されたのは4隅のうちの北東隅のみと、北壁及び東壁のわずかな一部である。周溝は検出されていない。これをはたして、竪穴住居跡とすべきかには疑問の余地が残される。

当時の記録として、埋蔵文化財資料館に残されているのは、概報及び住居跡平面図と断面図のみである。E区が既に消滅している以上、判断は調査者の記述に頼る他はない。し

かし、第5号竪穴住居跡とされる掘り方は、平面の大部分が検出されていない。また、わずかに検出された北東隅は直角ではなく鈍角を呈し、周溝すら検出されていないものを竪穴住居跡と認定しうるのであろうか。この疑問は、埋蔵文化財資料館に収納されている第5号竪穴住居跡の出土遺物により、さらに増幅される。

埋蔵文化財資料館には第5号竪穴住居跡の出土遺物が、小袋で4袋のみ収蔵されている。中世の土器がきわめて多く、わずかに弥生・古墳時代の摩滅した土器片が混じる程度である。特に、本遺構の出土遺物中もっとも大きな土器片は、18の羽釜である。これらの遺物がどのようにして出土したかは、明かではない。しかし、以下の可能性があることを指摘しておく。

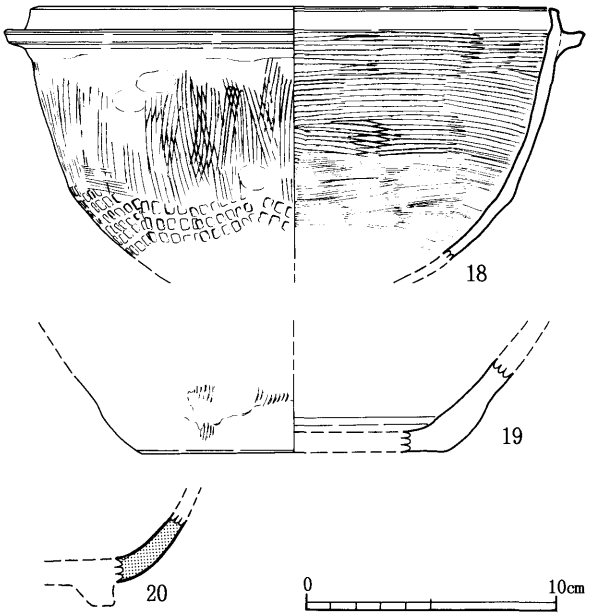


Fig. 77 第5号竪穴住居跡出土土器実測図

1，発掘調査時に、様々な遺構の切り合を住居跡にしてしまった可能性。

2，第5号住居跡がやはり古墳時代の竪穴住居跡で、中世の遺構に切られている可能性。

3，第5号住居跡は中世の遺構である可能性。

第5号竪穴住居跡出土遺物（Fig.77, PL.41）

18は羽釜である。復元口径21.0cm。鍔の側縁部で復元径23.0cmを測る。鍔は、ヨコナデによる貼り付けである。口縁端部は、ヨコナデによって内面に突出する。調整は外面上半はタテハケであるが、下半に斜格子のタタキを残す。この外面の調整と対応するように、内面調整であるハケ工具の原体が異なる。外面タタキに対する位置でのハケは5本で幅4㎜と細く、外面タテハケに対応する位置でのハケは5本で幅8㎜と広い。外面の鍔から下半に煤が付着する。19は瓦質鉢の底部。かなり摩耗が激しい。外面にハケ痕を残す。20は青磁碗である。内面底部を沈線が円形にはしる。釉が発泡して黄色に変色している。二次焼成を受けているのであろうか。

この他、図示できなかったが、土師椀・皿、瓦質土器などがある。

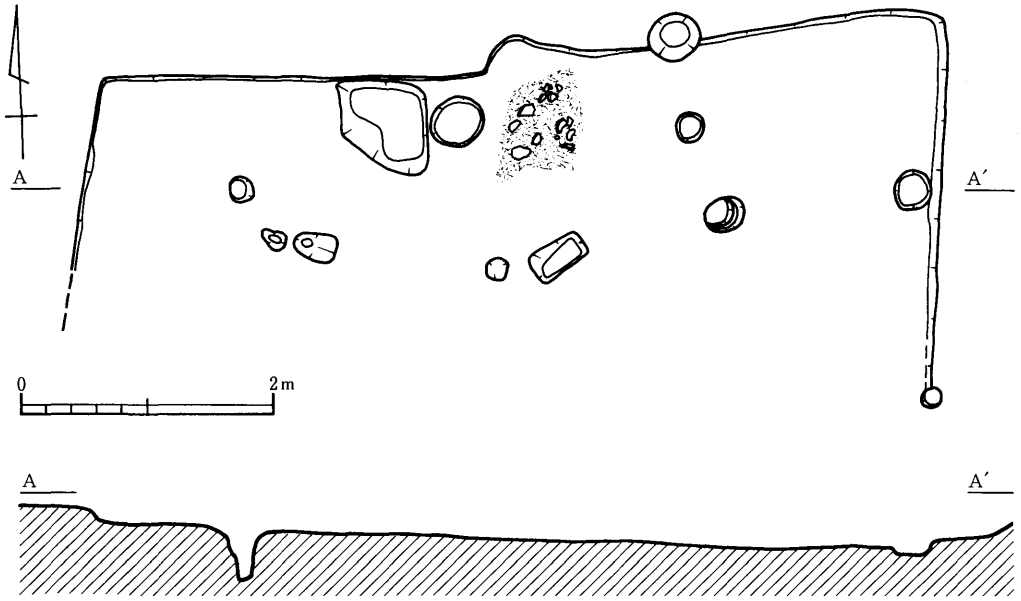


Fig. 78　第6号竪穴住居跡実測図　　（標高は不明）

第6号竪穴住居跡（Fig.78）

第6号竪穴住居跡は第3号竪穴住居跡に隣接し、第4号竪穴住居跡からは北西方向約3mの地点にある。この住居跡も崖面に近く、南壁及び東西両壁の大半を流失している。しかし、長さ6.7mの北壁およびその両隅は残存しており、住居跡であることは確実である。平面形態は、方形あるいは長方形を呈するものと推察される。床面は遺構検出面から、深さ約10cmを測る。周溝をもたない。

北壁の中央部付近に接して、長軸70cm、短軸60cmの範囲に厚さ20cmばかりの焼土が検出されている。焼土部分に接する北壁は、わずかではあるが半円形に外側に張りだしている。上部構造こそ、削平のために確認できないが、第2号竪穴住居跡のものと同じく竈と見なして間違いないであろう。柱穴に関しては概報によれば「住居址やその周辺には、大小さまざまな柱穴が入り乱れていて、これもまたどれがこの住居址のものかを明らかにすることが難しい。」と記述される。

概報には「住居址の内部から石製紡錘車・石庖丁・石鏃と弥生式土器や土師器の破片が多数出土し、床面近くから弥生後期の特徴を残す甕や高坏の破片が出土した。」とあるが、石製紡錘車・石庖丁の所在は不明である。

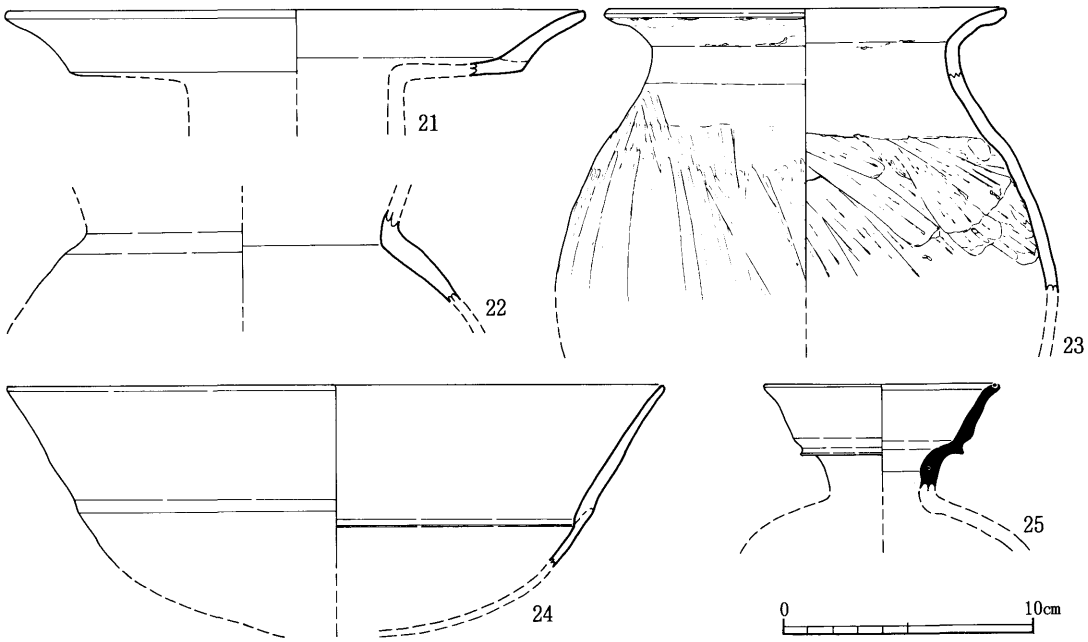


Fig. 79 第6号竪穴住居跡出土土器実測図

第6号竪穴住居跡出土遺物 (Fig.79, PL.41)

21は二重口縁壺である。口縁部とその口縁部への屈曲部分の破片である。復元口径は23.0cmを測る。屈曲部は鋭く折れ、口縁端部は丸い。内外面の風化が著しい。22は壺である。頸部の破片のため、口縁形態が明らかでない。頸部のもっとも締まった位置で径12.4cmを測る。内外面の風化が著しい。23は甕である。長胴の胴部に短いが強く屈曲する口縁部をもつ。復元口径16.0cmであるが、口縁部は極めて小破片であるため、径の復元が可能な胴部との合成により口径を求めている。復元口径の数値に誤差が含まれている可能性は高い。外面調整は、粗いハケ後ナデである。内面は右から左方向へのケズリである。24は高坏である。口縁部の小破片である。内面は明瞭な段をもって屈曲するが、外面は不明瞭である。風化が著しい。弥生時代後期の高坏が混入した可能性が高い。

25は須恵器甕である。復元口径9.4cmを測る。頸部は外反し、さらに外方へ屈曲させ口縁部となる。屈曲部は、強くナデられ、シャープな凸線となる。口縁端部はヨコナデにより、上部に面をもちながら外方に突出する。頸基部は、もっとも締まった位置で径4.2cmを測る。内面は荒れるが焼成はよく、断面セピア色を呈する。以上の特徴は、山口県内出土の甕のなかで最も古い形態と考えられる。田辺昭三氏による須恵器編年のＴＫ－23[5]まで降りるとは考えられない。ＴＫ－208～216に属する山口県内初期須恵器の一例である。

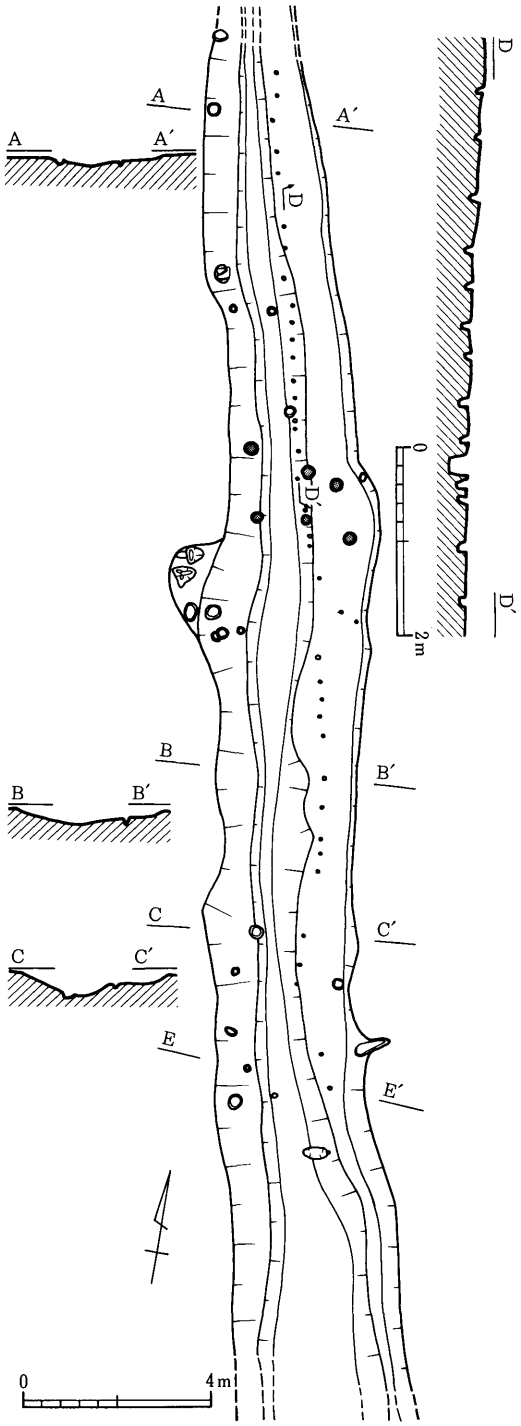


Fig. 80 溝状遺構実測図 （標高は不明）

(2) 溝状遺構（Fig.80）

本遺構は、調査区の東端で検出された、古代の土師器・須恵器を含んだ溝である。地形の傾斜に沿って、北から南方向に掘削され、その両端は調査区外に続いている。調査区内で検出された溝の全長は、約28.0mである。溝幅は、最大約3.6m、最小約2.0mである。標高の高い調査区北端の溝幅が最も狭く、南へと標高が下がるにつれて溝幅を広げるようである。また、断面も南に行くにしたがい浅い逆台形から、東側に肩をもつ逆台形の溝となる。その深さは調査区北端で約20cm、南側の最深部で約80cmを測る。地形の傾斜および溝の形態が示すように、流路の方向は北から南である。概報には溝の土層堆積に付いて「この溝の上層には、黒褐色土層、下層には青味を帯びた褐色土層が埋積し、地山との境界近くには厚さ2cmばかりの砂層があって、水が流れたことがあることを示している。」と滞水していたことが記述されている。

なお、この溝状遺構からは、柱穴が検出されている。概報によれば「溝の中には2種類の柱穴群があった。その一つは直径20～30cm、深さ20cm内外のもので、調査地区の全域で検出されたものと同種のものである。他の一群は、溝の最下層の砂層を取り除いた状態で検出されたもので、溝底にあった柵か垣の跡とみられ4～6cm、深さ8cmばかりの先の尖った穴の跡が約20cm間隔に

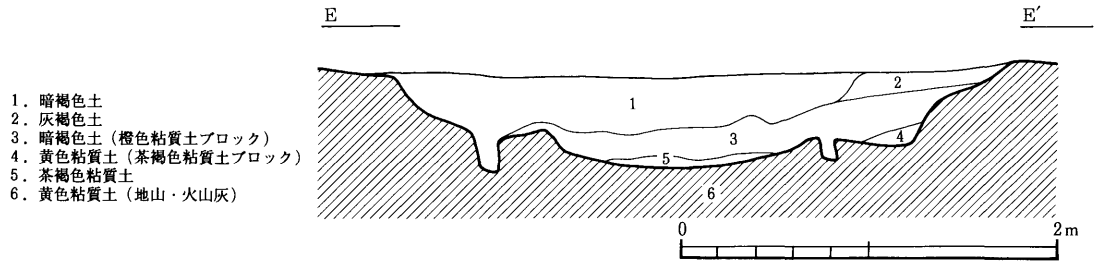


Fig. 81 溝状遺構土層断面図（E－E′）　（標高は不明）

遺存した。」としている。このうち、直径20～30cm、深さ20cm内外の柱穴が1列3本で、それらが2列になって溝と直交する箇所がある。その箇所は、調査区の中央よりやや南側によっている。柱間は柱穴の中心から約1.0mの間隔であり、柱穴列の幅は1.0～1.5mである。この柱穴列に関しての記述は、概報には認められない。しかし、本報告では橋脚遺構の可能性を示唆しておきたい。溝状遺構が何らかの施設を区画するものであり、柱穴列の橋脚遺構はその出入口と考えられる。この溝状遺構をはさんだ調査区の東側と西側では、柱穴の分布密度が著しく異なる。東側はほとんど柱穴が検出されないが、西側では多数検出されている。これらの柱穴から出土した遺物は、今のところ埋蔵文化財資料館では見あたらない。このため、溝状遺構とどの柱穴が時期的に対応するものか検証のしようがないが、柱穴の分布密度からいっても溝状遺構の西側に建築物があったことは確かであろう。

また、溝状遺構の東肩で検出された直径4～6cm、深さ8cmばかりの先の尖った穴の跡については、概報では柵か垣の可能性を推定している。確かに20cm間隔で並ぶ小穴は、垣などの施設をほうふつさせる。しかし、注意せねばならないのは、西肩にも直径約20～30cmの柱穴が並ぶ可能性があるということである。この柱穴が西側の建築物を囲んだ板塀などの柱であるとするならば、板塀の外にさらに垣があったとは考えがたい。また、先に橋脚としたその下の部分にまで、この小穴が続くことからも柵や垣の可能性は低下する。むしろ東肩護岸のための杭の可能性が高いのではないだろうか。

溝状遺構の機能年代として、その出土遺物から9世紀前半～10世紀前半の年代が考えられる。溝状遺構は調査区外に広がるため、どのような形状をとるのかは定かではない。しかし、西側の施設を区画しているようであり、橋や護岸の杭などからも、単なる平安時代前期の溝とは考えがたい。あるいは、本調査区よりもやや北にあがった、大学会館の新営に伴う発掘調査[6]で出土した石磚帯や須恵器の硯あるいは木簡などとの関連を想定すべきなのかもしれない。

出土遺物

土師器坏（Fig.82－26～30, PL.42）

高台はなく、円盤状の底部のものを坏として一括した。26は内弯しながら立ち上がる体部をもつ。内外面の風化が著しいが、底面にかすかにヘラ切り痕が観察できる。復元底径5.8cm。27は底部のみ。内外面の風化が著しい。復元底径6.1cm。28は底部のみ。底面のヘラ切りは、ナデ消される。底径6.3cm。29はやや内弯しながら立ち上がる体部をもつ。内外面の風化が著しい。復元底径7.0cm。30は外方に開く体部をもつ。底面にはヘラ切り痕を残す。復元底径6.2cm。

土師器埦（Fig.82－31～38, PL.42）

高台をもつものを一括した。31・32は高台の幅が薄く、突出が極めて高いもの。31は底面ヘラ切り痕をナデ消す。復元底径7.6cm。32は高台端部を欠損する。

33～38は高台の幅が厚く、突出が低いもの。胎土に砂粒を多量に含むが、36・38はあまり砂粒を含んでいない例外品である。そのうち38は胴部が弯曲をもって立ち上がり、高台も丸い。時期の下降する混入遺物であろう。復元底径7.4cm。36は精製粘土を使用する。高台は胴立ち上がりの屈曲部よりも、内側に貼り付けられる。器形は極めて9世紀後半の須恵器坏に似る。須恵器工人の手によるものか。底径6.8cm。33は胴部が直線的に開く。復元底径7.1cm。34の高台は断面三角形を呈するが先端がつぶれている。底径6.7cm。35の高台は断面逆台形を呈する。復元底径6.0cm。37の高台は断面三角形を呈する。復元底径6.2cm。

土師器甕（Fig.82－39～43, PL.42）

口縁部がわずかに外反する長胴の甕である。39は器壁が8mmと厚く、肉厚の口縁端部は丸く収められる。大粒の砂粒を多量に混じえる。器面の風化が著しいが、外面くびれ部に煤の痕跡を残す。弥生時代後期終末の甕の可能性もある。復元口径26.0cm。40は外面の頸部から胴部にかけて、ヨコナデの凹凸を残す。砂粒を多量に混じえる。色調は淡赤褐色で、2次焼成によるものと考えられる。復元口径27.0cm。41はほとんど頸部に屈曲をもたない。胴部より口縁部は徐々に開き、口縁端部はヨコナデによって外方に突出する。外面には多数の指頭圧痕を残す。復元口径26.0cm。42はやや胴部が張り、頸部に屈曲をもつ。口縁端部は、ヨコナデによって丸く収められる。器壁は3.5mmと薄い。復元口径21.4cm。43は胴部が張り、口縁部が屈曲する。口縁部は胴部に対して、やや長い。胴上半部の外面には、シボリによってヒビが入る。弥生時代後期終末の甕の可能性もある。復元口径18.8cm。

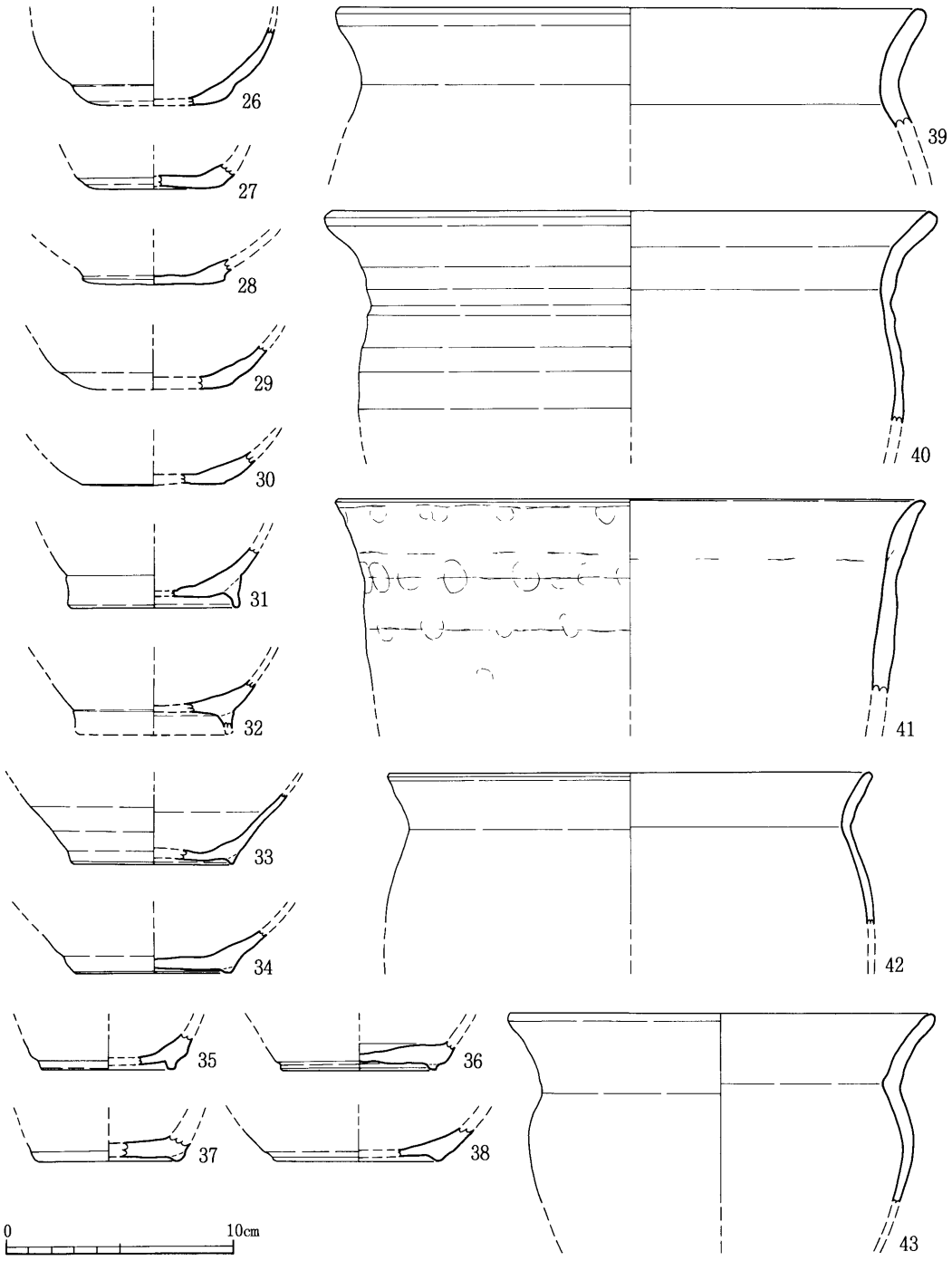


Fig. 82 溝状遺構出土土器実測図(1)

須恵器坏（Fig.83－44～66, PL.43）

44～59は高台をもつ坏である。高台には2種類の形態がある。

44～47・51・52は高台内端が下方へ突出し、接地面となるものである。このうち、44～47は底径が8.0cmを超える大型のもので、51・52は底径が8.0cm以下の小型のものである。44は高台が底部と胴部の屈曲部に接して貼り付ける。復元底径10.8cm。45はやや摩滅する。復元底径8.8cm。46は復元底径9.8cm。47は高台が低い。復元底径9.8cm。51は復元底径6.4cm。52は復元底径7.4cm。48～50, 53～59は高台が内端・外端とも接地、あるいは外端だけが接地するものである。このうち、48～50は底径が8.0cmを超える大型のもので、53～59は底径が8.0cm以下の小型のものである。48は高台内端接地の名残をとどめ、高台内側が突出する。復元底径8.4cm。49もわずかに高台内端接地の名残を留める。復元底径9.5cm。50は底面にヘラ切り痕を残す。復元底径11.0cm。53は高台の外端面が接地する。器壁がやや厚く、壺底部の可能性もある。復元底径6.6cm。54は高台が底部中心よりに貼り付けられる。復元底径7.1cm。55は高台が底部中心よりに貼り付けられる。復元底径6.0cm。56は復元底径6.6cm。57は高台が低く、坏部がやや外方に開く。復元底径6.4cm。58は低い高台を、底部と胴部の屈曲部に貼り付ける。焼成が極めて悪い。底径6.0cm。59は1／2を欠損するが全形のわかる個体である。底部から、やや膨らみをもって斜めに立ち上がる胴部をヨコナデによって外反する口縁部をもつ。低い高台を底部と胴部の屈曲部に接して貼り付ける。器高4.7cm、復元口径11.9cm、復元底径7.4cm。

60～66は高台をもたない坏である。60は直線的に開く胴部をもつ。口縁部内面はヨコナデによってやや面をもつ。底面にはヘラ切り痕のうえに、板敷状の圧痕がつく。底部内面に不定方向のナデが施される。器高3.3cm、復元口径12.5cm、復元底径6.1cm。61は胴部がやや内弯しながら立ち上がる。復元底径7.7cm。62は蓋形土器の可能性もある。底面にヘラ切り痕が残る。復元底径8.0cm。63は底部にヘラ切り痕を残す。復元底径7.4cm。64は底部側面に、ヘラがあたって沈線状になる。復元底径8.0cm。65は極めて焼成が悪い。底面にヘラ切り痕を残す。復元底径6.4cm。66は底面に板敷状の圧痕を残す。復元底径6.9cm。

須恵器坏蓋（Fig.83－67･68, PL.43・44）

67・68は坏蓋である。67はつまみ部分である。つまみは直径2.6cmの扁平で、中央部が凸形をなす。外面に緑色の自然釉が付着する。68は全体の約1／2が残存する。水平に近い天井部と2段階に屈曲した端部をもつ。円盤状のつまみを有していたと考えられる。復元口径約13.0cm。

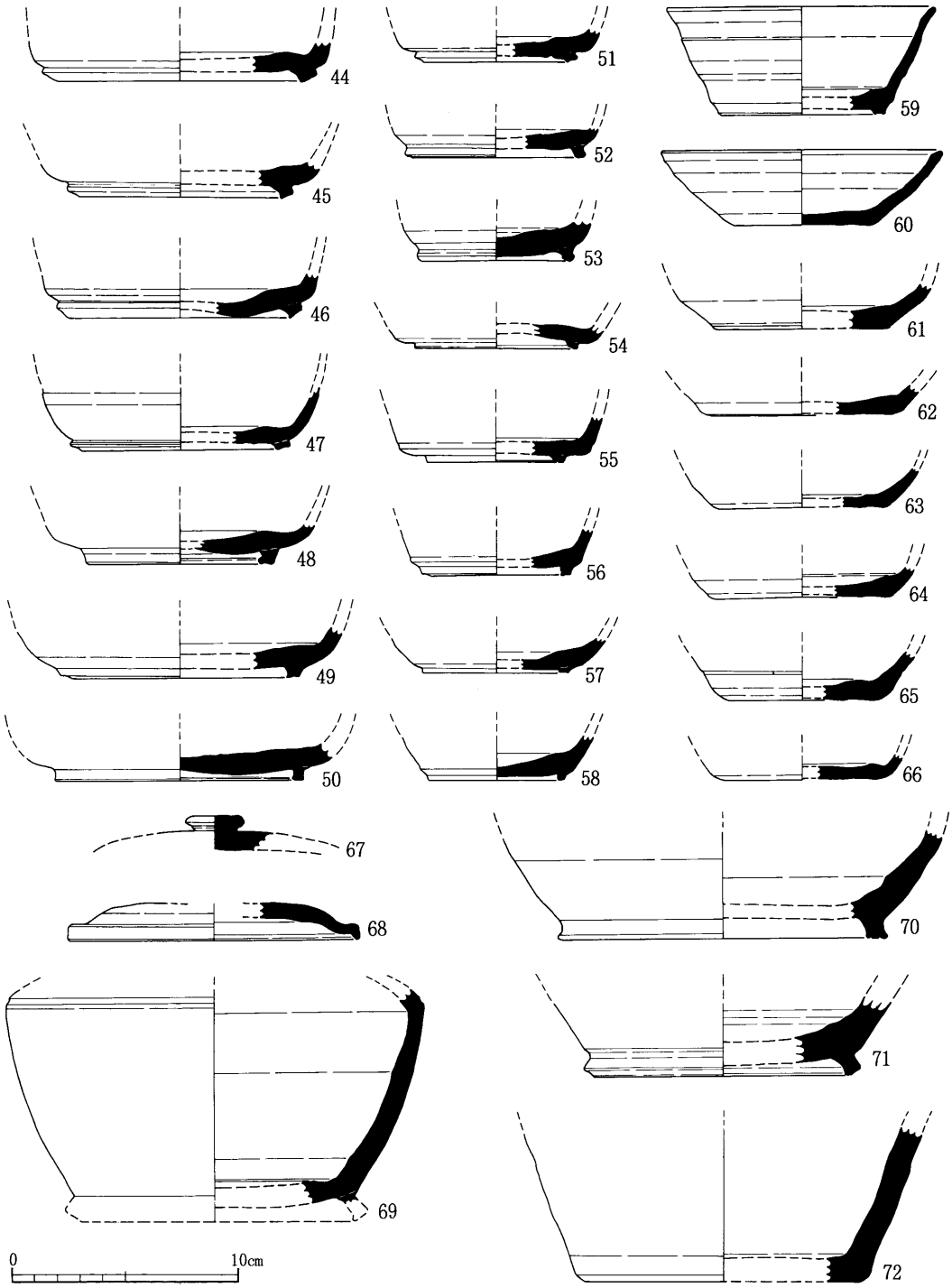


Fig. 83 溝状遺構出土土器実測図(2)

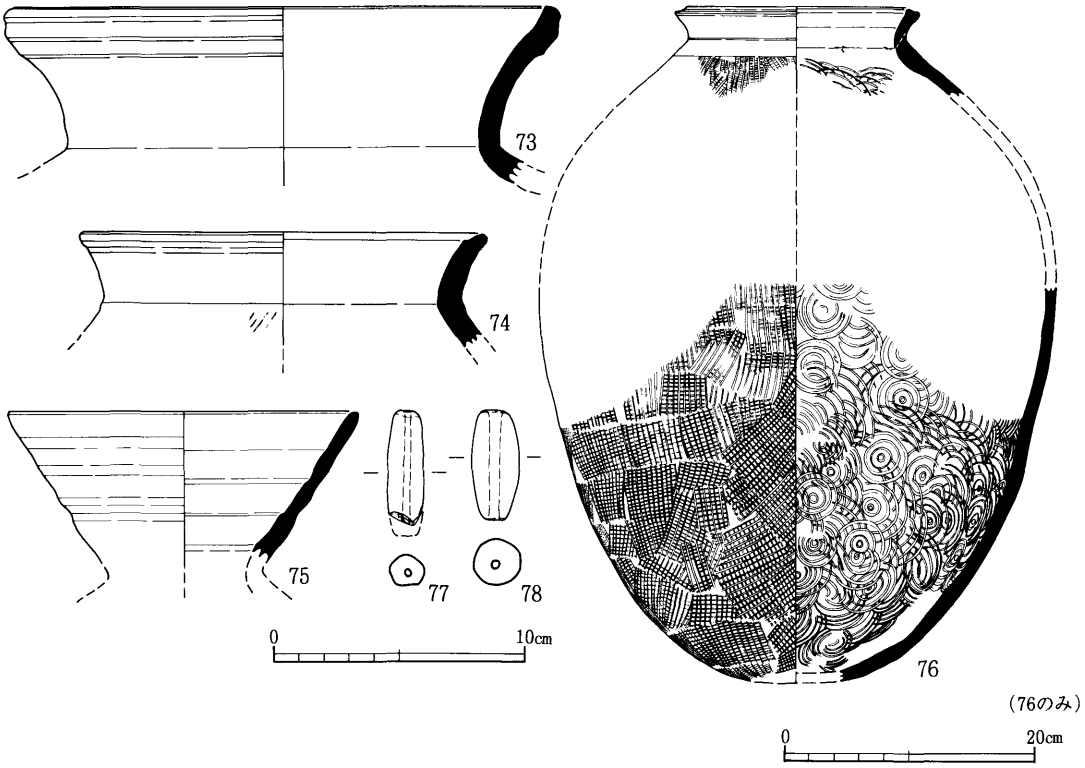


Fig. 84 溝状遺構出土遺物実測図(3)

須恵器壺 (Fig.83－69～72･75, PL.44)

69～72・75は壺である。69は長頸壺の胴部と考えられる。脚端部と胴部上半を欠損し、残存する下半部も1／2を欠く。肩部は張りをもち、張った部分に沈線をめぐらす。高台は底部と胴部の屈曲部分に貼り付け、外方に突出している。70は底部と胴部の屈曲部分に、外側に張り出す高台を貼り付ける。高台端部は、内端をつまみ出す。復元底径14.6cm。71は外面に自然釉が付着する。復元底径12.2cm。72は高台をもたない平底のもの。外面に時計まわりのケズリ後にナデ調整がみられる。75は口縁部である。直口で頸部に対して口縁部がやや開き気味である。内外面に、ロクロ成形による凹凸を明瞭に残す。復元口径14.0cm。

須恵器甕 (Fig.84－73･74･76, PL.44・45)

73・74・76は甕である。73は2段階に屈曲しながら口縁端部が立ち上がるもの。復元口径21.2cm。その形態から、溝状遺構が機能した時期よりも若干遡る混入遺物の可能性が高い。74は短い口頸部が直立するもの。口縁上端はナデによって幅広い凹面をもつ。口縁内

面に、2本の直線によるヘラ記号を有する。復元口径16.3cm。76は鶏卵形の胴部に、短くやや外反する口縁部をもつ。底部は丸底である。口縁上端はナデによって、幅広い凹面をもつ。外面には格子の叩き、内面には同心円のあて具痕を残す。

土錘（Fig.84－77･78, PL.44）

77・78は管状の土錘である。77は一方の端部を欠損する。残存長4.55cm、太さ1.3cmである。孔の径は3mmである。摩滅する。78は、長さ4.4cm、太さ1.8cmである。孔径は4mmである。いずれも胎土は精良な粘土であるが、摩滅する。

砥石（Fig.85－79, PL.44）

79は凝灰岩を用いた砥石である。すり面を上面とするならば上面の長辺が5.9cm、短辺5.2cmで、厚さは5.35cmのいびつな立方体を呈している。上面は度重なる使用によって光沢をもつ。下面も安定のためか、あるいは一時的な使用のためか平坦面をもつ。重量は246.58gである。帰属年代は不明である。

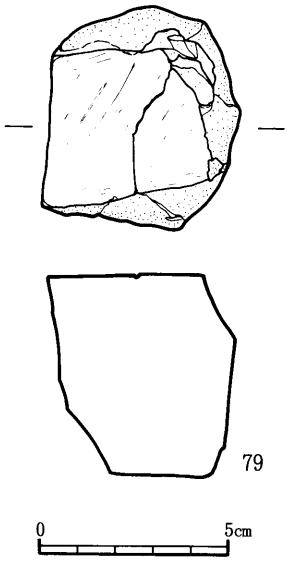


Fig. 85
溝状遺構出土砥石実測図

(3) 土壙（Fig.68）

E区からは、2基の土壙が検出されている。第1号土壙は調査区のほぼ中央、第2号竪穴住居跡の東側に検出されている。直径約3.0m、深さ0.8mの円形を呈する。第2号土壙は第6号竪穴住居跡の東側で検出されている。長径4.5m、短径2.75m、深さ1.1mの不整楕円形を呈する。いずれ土壙も住居跡と同じ、黒褐色土の埋土であった。遺物は全く見当たらなかったらしいが、その埋土から住居跡と同じあるいは近い年代が想定される。

(4) 柱穴群（Fig.68）

柱穴は、竪穴住居跡内部のものも含めて総数約182個を数えるという。概報によれば「調査地区全域にわたって分布するが、三つの群を形成しているようである。」とされる。第1号土壙の北側の1群、第3号竪穴住居跡の北西側の1群、第1号竪穴住居跡付近の1群を指すのであろうか。ただし、そのまとまりに意味があるかは、柱穴出土遺物が不明のため検証のしようがない。さらに概報は「弥生時代から古墳時代を経て中世にいたる各時代の柱穴が重複しているらしいので、組み合せがはなはだ困難である。なお、この柱穴から弥生式土器や瓦器の破片が出土した。瓦器が出土するものがあるところから、その多くは中世の柱穴群とみてよいであろう。」とするが、溝状遺構との関連が問題となろう。現在の埋蔵文化財資料館が有する資料では、掘立柱建物を復元することは不可能であった。

(5) 遺構に伴わない遺物（Fig.86－80～99, PL.45・46）

Ｅ区出土遺物で、包含層あるいは遺構に伴わないもの、また遺構に伴うが明らかに遺構とは異なる時期のもの、あるいは注記が不明なものをまとめて報告する。該当する時期の遺構はない（？）が、弥生時代の土器や石鏃が多数出土している。

80・81は前期弥生土器有文壺である。80は文様帯の下端を３条の沈線で区画し、綾杉文が施されている。文様帯の上端区画は破片のため明かではない。文様及び沈線は、鋸歯状圧痕のつく貝殻による施文。第２号竪穴住居跡包含層中出土。81は羽状文を有する。鋸歯状圧痕のつかない貝殻による施文。包含層出土。

82は垂下口縁壺である。口縁部と垂下部の屈曲部分が強いヨコナデによってつまみ出され、跳ね上げ状の口縁端部となる。垂下部外面は、板状工具による山形文が施される。出土地点不明。83は複合口縁壺。口縁部が受け口になるが、外面の屈曲部が垂下口縁状に突出する可能性があり、弥生時代中期末に属するのではないかと考えられる。口縁部外面は、板状工具による山形文が施される。出土地点不明。84は水平口縁高坏か。鍔状に突出した口縁部分の破片である。端部は面をもち、竹管による刺突文が施される。口縁上面はミガキが施されている。第４号竪穴住居跡西側トレンチ出土。

85は複合口縁壺である。開いた口頸部の端部上面に粘土を積み上げ、受け口状の口縁をなすもの。屈曲部は、鍔状に突出する。口縁部外面には波状文が施される。口縁端部は面をもつ。第２号竪穴住居跡包含層中出土。86は小型器台である。基部の破片である。胎土は精製粘土を使用する。出土地点不明。87は土師器高坏である。坏部と脚裾部を欠損する。内面はケズリ、風化が著しい。第２号竪穴住居跡包含層出土。

88～91は前期弥生土器壺底部である。88は底部側面に、貝工具か板工具かは不明であるが２条の押圧沈線をめぐらせる。内外面ともに風化が著しい。出土地点不明。90は底面の器壁が厚い。風化が著しく、外面に砂粒が吹き出している。第６号竪穴住居跡包含層中出土。89・91は前期弥生土器壺底部と思われるが、中期の可能性もある。89は風化が著しく外面の器面は剥落するが、内面にミガキを残す。第２号竪穴住居跡包含層出土。91は弯曲しながら立ち上がる胴部と、突出した底部をもつ。内面の底面に、ハケ痕を残す。外面の底面には、砂粒の圧痕を明瞭に残す。出土地点不明。92～95は前期弥生土器甕底部である。92は風化が著しく、器面には砂粒が吹き出す。第２号竪穴住居跡床面出土。93も風化が著しく、破面の摩耗も激しい。第６号竪穴住居跡包含層中出土。94もまた風化が著しいが、外面には胴部接合痕を残す。第６号竪穴住居跡包含層中出土。95は外面に一部ハケの痕跡を残す。

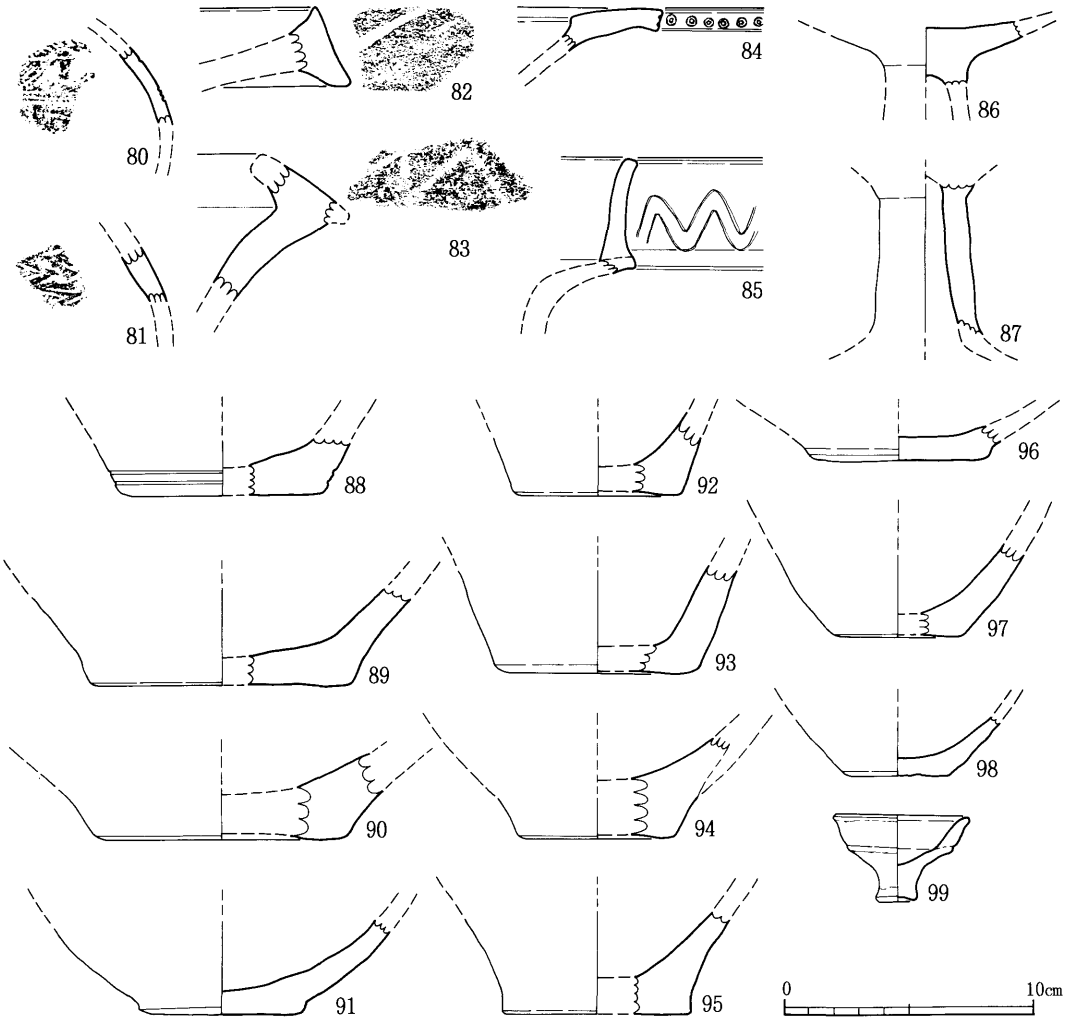


Fig. 86　遺構に伴わない土器実測図

出土地点不明。96は中期弥生土器壺底部である。風化が著しい。第4号竪穴住居跡西側トレンチ出土。97は後期弥生土器甕底部である。風化が著しい。第6号竪穴住居跡包含層中出土。98は土師器鉢の底部か。胎土は精製粘土を使用する。溝状遺構包含層出土。

99はミニチュア高坏である。脚部は指でつまんで作り出す。脚底面と脚端部側面をつまんでヨコナデし、わずかに丸く突出した裾部を成形する。このため、脚底面はくぼむ。坏部は大きく開いて屈曲し、口縁部へと立ち上がる。この屈曲部は作業工程上において小休止があったらしく、擬口縁状に口縁部が剥離する。口縁端部はわずかに屈曲する。なお、上下逆として蓋形土器のミニチュアという考え方もできる。出土地点不明。

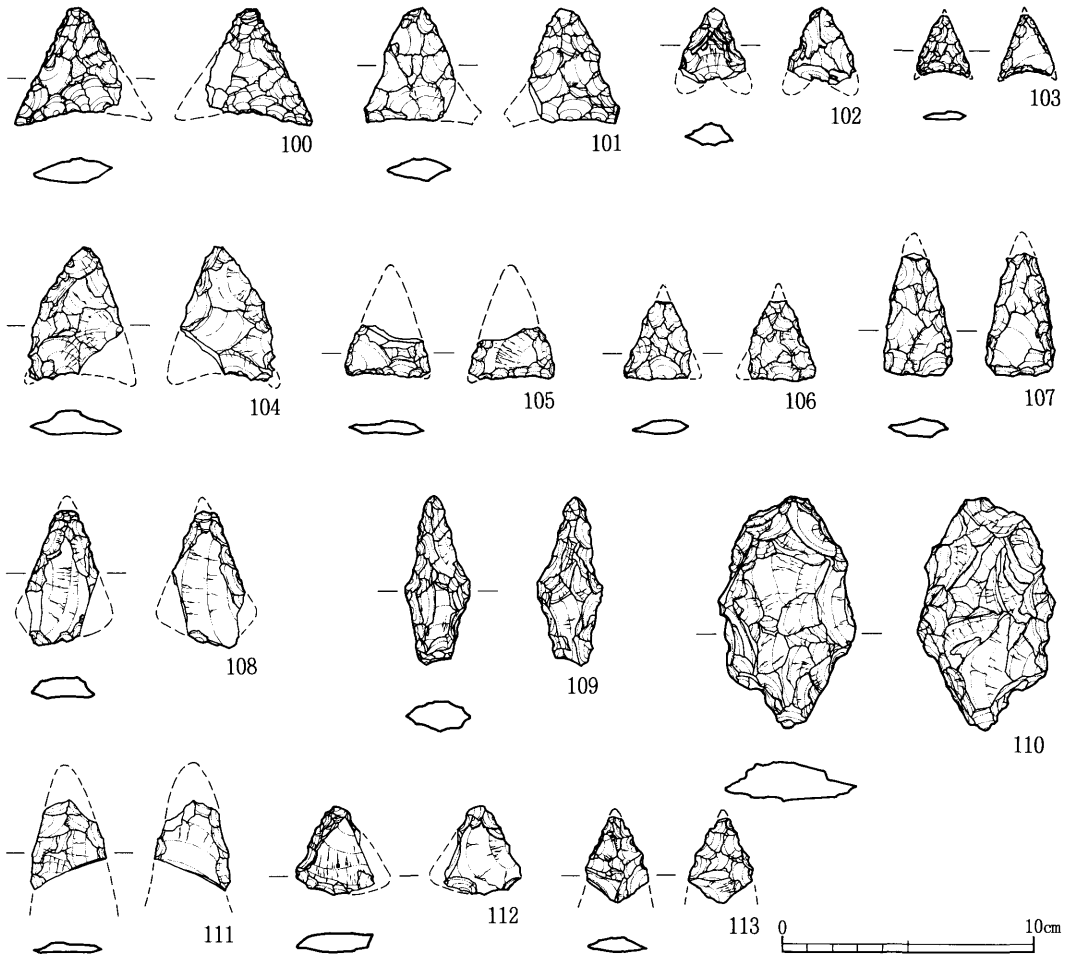


Fig. 87　遺構に伴わない石鏃実測図

石鏃（Fig.87－100～113, PL.47）

第Ⅰ地区Ｅ区からは、多数の剥片や石鏃が出土しているが、いずれも遺構に伴うものではない。剥片は割愛するが、石鏃はすべて図示した。

100・101は姫島産黒曜石。102～106・108～113はサヌカイト。107は結晶片岩を石材とする。形態は100～105が凹基式、106・107が平基式、108・109が凸基式、110が有茎式に分類される。なお、111～113は損傷のため、形態が明かでない。103・105・108・111・112は周縁部の細部調整のみで、主要剥離面を残している。103は長さが1.2㎝、重量0.21ｇと極めて小形である。これに対して、110は長さが4.6㎝、重量9.08ｇという大形のものである。110は大形化、また有茎式という形態的特徴から弥生時代中期後半のものと考えられる[7)]。

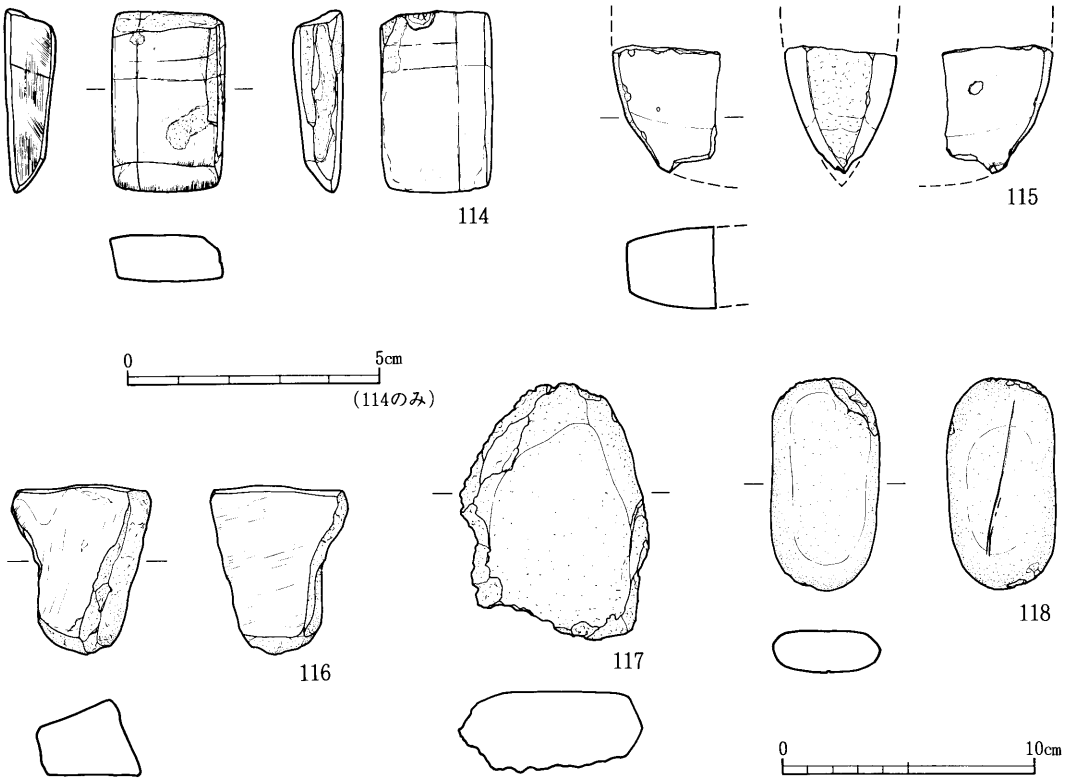


Fig. 88 遺構に伴わない石器実測図

扁平片刃石斧（Fig.88－114, PL.46）

側面の片側に、自然面を残す。基部の側面形は平坦ではなく、下部が突出する。幅は2.25cmと小形である。石材は緑色の泥岩。溝状遺構出土。

太形蛤刃石斧（Fig.88－115, PL.46）

太形蛤刃石斧の破片と考えられる。刃部先端であろうか。側面がやや面をもち、太形蛤刃石斧とすれば整いすぎるきらいがある。損傷が激しい。石材はひん岩。溝状遺構出土。

砥石（Fig.88－116, PL.46）

両面を使用している。片面は平坦であるが、もう一面は使用によりくぼむ。石材は結晶片岩。出土地点不明。

用途不明石器（Fig.88－117·118, PL.46）

117は平坦な面を有し、焼成を受ける。石材はデイサイト。118は扁平な安山岩であるが、片面に線刻をもつ。117と118は出土地点が不明であるが、同じ袋に収納されており同一地点出土と考えられる。火を受けることから、住居跡出土の可能性がある。

6　小結

遺構・遺物

弥生時代

図示できないような、小片で摩耗した弥生土器が多数出土している。石鏃や石斧もあり生活の痕跡を残している。しかし、明確な弥生時代の遺構はなく、古墳時代の住居跡の残存状態から考えるならば、調査時には既に消失していた可能性がある。

古墳時代中期

５棟の竪穴住居跡について、出土土器から変遷順位を決定することは困難である。というのも各住居跡とも出土土器が少ないうえ、山口県内における土師器編年は完成していないからである。須恵器を出土した６号住居跡のみが、陶邑編年によって時期決定を行えるのであるが、Ｅ区竪穴住居群での相対的な年代を求めることはできない。変遷順位で唯一判明しているのは、３号竪穴住居跡が２号竪穴住居跡に切り込まれていることのみである。各竪穴住居跡の変遷順位は、その構造差および占地状態から推定する他はない。

５棟の竪穴住居跡は、２号と３号の切り合いに代表されるように、同時並存が不可能なほど近接し合うものがある。近接し合うもの同士をグルーピングすると、１・４号住居跡のＡ群と２・３・６号住居跡のＢ群にまとまる。同時並存が不可能な以上、同じ群内の竪穴住居跡には、必ず先後関係がなければならない。Ａ群の１号竪穴住居跡と４号竪穴住居跡を比較すると、両者はその構造において著しい差がある。１号竪穴住居跡は正方形プランで東側に竈をもつが、４号竪穴住居跡は長方形プランで竈をもたない。この差から、４号竪穴住居跡よりも１号竪穴住居跡に新出的要素を見いだすことができる。

Ｂ群では、切り合いから確実に３号竪穴住居跡よりも２号竪穴住居跡が新しいことが分かる。６号竪穴住居跡は、２・３号竪穴住居跡が保有しない須恵器をもつことから、Ｂ群で最も新しいと考えられる。ただし、６号竪穴住居跡の須恵器甕は、TK－216～208併行の地方窯成立以前の古式須恵器であり、２・３号竪穴住居跡が６号竪穴住居跡以後としても須恵器の供給体制が完成されておらず入手できなかった可能性がないわけではない。これに対しては、次のように判断される。棟方向の一致などから３号住居跡と２号住居跡の連続性が考えられる以上、６号住居跡は３号住居跡より以前か２号住居跡の以後に位置づけざるを得なくなる。３号住居跡出土の土師器は、６号住居跡出土の須恵器が示す年代以後のものとは考えられない。とすれば６号住居跡は、２号住居跡以後に位置づけざるを得ないのであり、６号住居跡のみ古式須恵器が出土した状況とも一致する。以上のことから、

B群は3号住居跡、2号住居跡、6号住居跡の順で変遷が考えられる。

同時並存がおこりうるA群とB群の関係であるが、A群1号住居跡とB群2号住居跡に注目したい。住居跡の規模、棟方向、東壁に設けられた竈の位置が同じで、両者が並存した可能性は強い。このことより、E区における竪穴住居跡の変遷は次のように考えられる。3・4号住居跡（両者の前後・並存関係は不明）→1・2号住居跡（両者並存）→6号住居跡

なお、6号住居跡から出土したTK－216～208併行の須恵器による5世紀中頃の年代を下限とし、竪穴住居跡の耐用年数を約20年とするならば、3・4号住居跡は4世紀末～5世紀初頭、1・2号住居跡には5世紀前半の年代が与えられる。

古代

溝幅2mを超える溝状遺構が、丘陵の傾斜に沿って南北に検出されている。この遺構は最深約80cmを測り、橋脚状の6本の柱穴をもつ。また、溝底の東側テラスで検出された杭列は護岸の為と考えられ、堅牢な作りである。本遺構から出土した土器には年代幅があり、溝の機能期間を示すものと考えられる。

溝状遺構出土の須恵器坏で最も古いタイプには、高台内端面の接地するものがあり、8世紀前半の年代が与えられる[8]。ただし、これらは小片で摩滅しており、混入遺物と考えられるものである。主体となる須恵器坏は、斜めに立ち上がる胴部をもち低い高台を底部と胴部の屈曲部に接して貼り付けるものと、斜めに立ち上がる胴部をもち平底のものである。これらの特徴から、9世紀前半以降の年代が与えられる。これら須恵器の一群とは別に、高く突出した高台をもつ椀と円盤状に突出した底部をもつ坏からなる土師器の一群がある。椀の底面にはヘラ切り痕を残すものがある。おそらく地方須恵器生産が終焉した10世紀前半に属するものであろう[9]。以上のことから溝状遺構の機能期間としては、9世紀前半～10世紀前半の年代が考えられよう。それらは奇しくも、大学会館の新営工事で出土した石硯帯や須恵器の硯、墨書土器、緑釉陶器の年代と一致するものである。庄家などの可能性を再考する余地がある。

中世

概報では5号住居跡とよばれていたものが、出土土器より推察すると中世の遺構であった可能性がある。なお、この遺構から出土した青磁碗（Fig.77－20）と、大学会館から出土した底部（年報Ⅲ，Fig.27－14）が接合した。

［注］

1）山口大学吉田調査団『山口大学構内第Ⅰ地区Ｅ区発掘調査概報』（山口大学、1976年）

2）山口大学埋蔵文化財資料館「大学会館新営予定地Ｍ－14・15区の試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅱ、1985年）

3）山口大学吉田調査団『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』（山口大学、1976年）

4）山口市教育委員会『西遺跡』（1986年）

5）田辺昭三『須恵器大成』（1982年）

6）山口大学埋蔵文化財資料館「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅲ、1985年）

7）平井　勝『弥生時代の石器』（『考古学ライブラリー』64 ニューサイエンス社、1991年）

8）周陽考古学研究所『山口県の土師器・須恵器』（1981年）

Tab. 4　出土遺物観察表

法量（　）は復元値

番号	器種	法量（cm）（①口径②底径③器高）	色調（①外面②内面）	胎土	注記	備考
第1号竪穴住居跡（Fig.70）						
1	土師器　高坏	②(13.0)	淡赤褐色	黒雲母の微砂粒を含む	P.D.1⑥ 焼土中 S.46.10.23	風化が激しい
第2号竪穴住居跡（Fig.72）						
2	土師器　二重口縁壺		①暗赤褐色 ②赤褐色	2mm強の石英角礫を含む	P.D.2 包含層中 S46.10.21	
3	土師器　甕	②2.6	乳白色	2～3mmの角礫を含む	P.D.2 包含層中 S46.10.21	風化が激しい
4	土師器　高坏		淡褐色	1mm前後の砂粒を含む	P.D.2 包含層中 S46.10.21	風化が激しい
5	土師器　高坏		黄白色	赤色斑粒を含む	P.D.2 床面 S46.10.23	風化が激しい
6	土師器　高坏		褐色	2～4mmの石英角礫を含む	P.D.2 包含層中 S46.10.21	風化が激しい
第3号竪穴住居跡（Fig.73）						
9	土師器　壺		淡赤褐色	赤色斑粒を含む	P.D.3 包含層上層5cmまで S46.10.28	風化が激しい
10	土師器　壺	②5.0	①淡褐色 ②淡赤褐色	精製粘土	P.D.3	風化が激しい
11	土師器　甕		淡黄白色	微砂粒を含む	P.D.3 上層 S46.10.28	風化が激しい
12	土師器　器台		淡黄白色	精製粘土に2mm前後の砂粒を含む	P.D.3 上層 S46.10.28	風化が激しい
13	土師器　鉢	②4.6	淡赤褐色	精製粘土に2～3mmの石英角礫を含む	P.D.3 土器① 71.11.5	底部焼成後の穿孔
第4号竪穴住居跡（Fig.75）						
14	土師器　高坏	①(18.8)	①褐灰色 ②淡褐色	精製粘土に4mm前後の石英角礫を含む	P.D.4 71.11.5	風化が激しい
15	土師器　高坏	①(18.0)	淡赤褐色	精製粘土に1mm前後の砂粒を含む	P.D.4	14と同一個体の可能性あり
16	ミニチュア土器		淡黄白色	黒雲母を含む	P.D.4 包含層中－15cm	風化が激しい
第5号竪穴住居跡（Fig.77）						
18	瓦質土器　鍋	①(21.0)	①褐灰色 ②灰黒色	精製粘土	P.D.5 71.10.22	外面に煤が付着する
19	瓦質土器　深鉢	②(12.2)	①黒灰色 ②淡灰青色	微砂粒を含む	P.D.5 S46.10.22	風化が激しい
20	青磁　碗		素地　灰色 釉調　緑黄色	精製粘土		
第6号竪穴住居跡（Fig.79）						
21	土師器　二重口縁壺	①(23.0)	灰色	2mm前後の石英角礫を含む	P.D.6	風化が激しい
22	土師器　壺		淡褐色	精製粘土に微砂粒を含む	P.D.6	風化が激しい
23	土師器　甕	①(16.0)	淡褐色	5mm前後の大粒の砂粒を含む	P.D.6 包含層上層 1971.10.27	外面粗いハケ後ナデ
24	土師器　高坏		淡赤褐色	精製粘土に微砂粒を含む	P.D.6 71.10.28	風化が激しい
25	須恵器　甕	①(9.4)	暗青灰色	微砂粒を含む	P.D.6 中上部	断面セピア色
溝状遺構（Fig.82・83・84・85）						
26	土師器　坏	②(5.8)	乳白色	赤色斑粒を含む	S46.11.3	風化が激しい
27	土師器　坏	②(6.1)	赤褐色	1mm前後の砂粒を多量に含む	S46.11.3	風化が激しい
28	土師器　坏	②6.3	黒灰色	1～2mmの砂粒を多量に含む	S46.11.3	風化が激しい
29	土師器　坏	②(7.0)	①赤褐色 ②黒灰色	1～2mmの砂粒を多量に含む	東溝状遺構71.10.21東溝状遺構第2・第3トレンチ	風化が激しい
30	土師器　坏	②(6.2)	①乳白色 ②黒色	1～3mmの砂粒を多量に含む	東溝状遺構 第7トレンチS46.10.20	風化が激しい
31	土師器　椀	②(7.6)	乳白色	微砂粒及び、2～3mmの砂粒を含む	東溝状遺構第12トレンチ包含層中S46.10.21	ヘラ切り底か
32	土師器　椀		乳白色	1mm前後の砂粒を多量に含む	東溝状遺構第12トレンチ包含層中71.10.21	風化が激しい
33	土師器　椀	②(7.1)	①淡赤褐色 ②褐灰色	微砂粒及び、赤色斑粒を含む	東溝状遺構第12トレンチ包含層中S46.10.21	内面に煤状のもの付着
34	土師器　椀	②6.7	①淡赤褐色 ②灰白色	微砂粒及び、2～3mmの砂粒を含む	東溝状遺構 2～3トレ包含層中	風化が激しい
35	土師器　椀	②(6.0)	乳白色	微砂粒を多量に含む	東溝状遺構第13～第14トレンチS46.11.1	風化が激しい
36	土師器　椀	②6.8	淡赤褐色	精製粘土	溝状遺構第3トレンチの間 東溝状遺構第2第3トレンチ	風化が激しい

吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査

法量（　）は復元値

番号	器種	法量（cm）（①口径②底径③器高）	色調（①外面②内面）	胎土	注記	備考
37	土師器　椀	②(6.2)	赤褐色	微砂粒を多く含む	東溝状遺構	風化が激しい
38	土師器　椀	②(7.4)	①淡褐色 ②黒灰色	精製粘土に2～3mmの石英角礫を含む		風化が激しい 混入遺物か
39	土師器　甕	①(26.0)	①淡褐灰色	3～4mmの石英角礫を含む	東溝状遺構	風化するが外面に一部煤を残す
40	土師器　甕	①(27.0)	①淡赤褐色 ②淡灰褐色	1～2mmの砂粒を多く含む	東溝状遺構 包含層中 S46.10.21	風化が激しい
41	土師器　甕	①(26.0)	①黒灰色 ②淡灰褐色	1～2mmの砂粒を含む		風化が激しい
42	土師器　甕	①(21.4)	①淡灰色	1mm前後の砂粒を多く含む	東溝状遺構 12トレンチ 包含層中	風化が激しい
43	土師器　甕	①(18.8)	①褐灰色 ②黒色	微砂粒及び、3～4mmの石英角礫を含む	東溝状遺構 第2第3トレンチ S46.11.1	
44	須恵器　坏	②(10.8)	灰青色	微砂粒を含む	溝 S46.11.5	高台は内端面で接地する
45	須恵器　坏	②(8.8)	淡青灰色	微砂粒を含む	溝 71.11.3	高台は内端面で接地する
46	須恵器　坏	②(9.8)	青灰色	1～2mmの砂粒を含む	溝 71.11.3	高台は内端面で接地する
47	須恵器　坏	②(9.8)	青灰色	精製粘土	東溝状遺構 16トレ S46.10.21	高台は内端面で接地する
48	須恵器　坏	②(8.4)	青灰色	微砂粒を含む	東溝状遺構 12トレ包含層中S46.10.21	
49	須恵器　坏	②(9.5)	灰青色	微砂粒を含む	溝状遺構 第3トレンチの間 S46.11.1	
50	須恵器　坏	②(11.0)	①灰青色 ②淡青灰色	精製粘土	東溝状遺構 第15トレンチ 包含層中 S46.10.21	ヘラ切り底
51	須恵器　坏	②(6.4)	淡青灰色	精製粘土	東溝状遺構 第2第3トレ間 S46.11.1	高台は内端面で接地する
52	須恵器　坏	②(7.4)	青灰色	微砂粒を含む	東溝状遺構 第12トレ包含層中 S46.10.21	高台は内端面で接地する
53	須恵器　坏	②(6.6)	青灰色	1～2mmの砂粒を含む	東溝状遺構 6トレ S46.10.20	高台は外端面で接地する
54	須恵器　坏	②(7.1)	青灰色	微砂粒を含む	東溝状遺構 第8トレンチ 底面 S46.10.20	高台は外端面で接地する
55	須恵器　坏	②(6.0)	青灰色	1mm前後の砂粒を含む	東溝状遺構 第2第3トレンチ	高台は外端面で接地する
56	須恵器　坏	②(6.6)	灰青色	微砂粒を含む		高台は内端面で接地する
57	須恵器　坏	②6.4	暗灰青色	1～2mmの砂粒を多量に含む	溝 71.11.3	高台は外端面で接地する
58	須恵器　坏	②6.0	淡黄灰色	微砂粒を含む	東溝状遺構 第7トレンチ	焼成不良
59	須恵器　坏	①(11.9)②7.4③4.7	青灰色	1mm前後の砂粒を含む	東溝状遺構 71.10.20	ヘラ切り底
60	須恵器　坏	①(12.5)②(6.1)③3.3	暗灰青色	1～2mmの砂粒を含む	東溝状遺構 第2第3トレンチ S46.11.1	ヘラ切り底
61	須恵器　坏	②(7.7)	青灰色	1mm前後の砂粒を含む	東溝状遺構 第7トレンチ	ヘラ切り底
62	須恵器　坏	②(8.0)	淡灰青色	1～2mmの砂粒を含む	東溝状遺構 第2第3トレンチ S46.11.1	蓋の可能性あり
63	須恵器　坏	②(7.4)	淡青灰色	精製粘土	東溝状遺構 0トレンチ	ヘラ切り底
64	須恵器　坏	②(8.0)	灰青色	微砂粒を多量に含む	溝 S46.11.1	ヘラ切り底
65	須恵器　坏	②(6.4)	淡黄灰色	1mm前後の砂粒を多量に含む	溝状遺構 第3トレンチの間 S46.11.1	焼成不良
66	須恵器　坏	②(6.9)	淡灰青色	微砂粒を含む	東溝状遺構 第2第3トレンチ S46.11.1	底面に板状圧痕
67	須恵器　坏蓋		外面に緑色の自然釉が付着　素地淡灰色	精製粘土	東溝状遺構 第13～第14トレンチ S46.11.1	
68	須恵器　坏蓋	①(13.0)	青灰色	1mm前後の砂粒を含む	S46.11.3	つまみをもつ
69	須恵器　壺		青灰色	1mm前後の砂粒を含む	東溝状遺構 第2トレ～第3トレ S46.11.1	
70	須恵器　壺	②(14.6)	淡灰青色	精製粘土	東溝状遺構 第12トレ包含層中 S46.10.21	内面に自然釉付着
71	須恵器　壺	②(12.2)	①淡灰青色 ②灰青色	2～3mm前後の砂粒を含む		外面に自然釉付着
72	須恵器　壺	②(12.2)	青灰色	2～3mm前後の砂粒を含む		
73	須恵器　甕	①(21.2)	淡青灰色	精製粘土に微砂粒を含む	溝 S46.11.3	古墳時代の混入遺物か
74	須恵器　甕	①(16.3)	①青灰色 ②灰青色	精製粘土に微砂粒を含む	東溝状遺構 第7トレンチ S46.10.20	口縁部内面にヘラ記号
75	須恵器　直口壺	①(14.0)	①灰青色 ②青灰色	2～3mm前後の砂粒を含む	東溝状遺構 第2第3トレンチ S46.11.1	
76	須恵器　甕	①(19.5)②丸底	青灰色	2～3mm前後の砂粒を多量に含む	東溝状遺構 第2トレ～第3トレ S46.11.1	

出土遺物観察表

法量（　）は復元値

番号	器　種	法　量（cm）（①口径②底径③器高）	色　調（①外面②内面）	胎　土	注　記	備　考
遺構に伴わない遺物（Fig.86）						
80	弥生土器　壺		褐色	2～3mmの砂粒を含む	P.D.2 S46.10.25	鋸歯状圧痕のつく貝殻による押圧綾杉文
81	弥生土器　壺		①褐色 ②黒灰色	2～3mmの砂粒を含む	包含層中 1971.11.4	鋸歯状圧痕のつかない貝殻による押圧羽状文
82	垂下口縁壺		褐色	2～4mmの砂粒を含む	71.11.3	風化が激しい
83	複合口縁壺		①淡黄灰色 ②灰黒色	3～4mmの砂粒を含む	溝	口縁に板状工具の押圧による山形文
84	高坏口縁？		①明黄灰色 ②黒色	2～3mmの砂粒を含む	P.D.4 71.10.28	内面ミガキ
85	複合口縁壺		①淡褐色 ②灰黒色	2～3mmの砂粒を含む	P.D.2包含層中 S46.10.17	風化が激しい
86	土師器　高坏		①淡赤褐色 ②淡黄灰色	精製粘土		
87	弥生土器　高坏		淡灰黄色	1～2mmの砂粒を多量に含む	東溝状遺構　第2第3トレンチ S46.11.1	風化が激しい
88	弥生土器　壺底部		①黒灰色 ②淡灰色	2～3mmの砂粒を多量に含む	S46.11.3	底部側面に押圧沈線2条
89	弥生土器　壺底部		明褐色	2～4mmの砂粒を多量に含む	P.D.2（上層） S46.10.22	風化が激しい
90	弥生土器　壺底部		淡黄灰色	1～2mmの砂粒を多量に含む	P.D.6中層 S46.10.26	
91	弥生土器　壺底部		淡褐灰色	1mm前後の砂粒を多量に含む		底面に黒斑
92	弥生土器　甕底部		①淡赤褐色 ②黒灰色	2～3mmの砂粒を多量に含む	P.D.2床面 S46.10.22	
93	弥生土器　甕底部		①赤褐色 ②淡黄色	2～3mmの砂粒を多量に含む	P.D.6	風化が激しい
94	弥生土器　甕底部		①淡黄灰色 ②淡灰黒色	2～3mmの砂粒を多量に含む	P.D.6下層 71.10.27	風化が激しい
95	弥生土器　甕底部		赤褐色	微砂粒を含む		
96	弥生土器　壺底部		①赤褐色 ②淡赤褐色	赤色斑粒を含む	P.D.4 71.10.28	風化が激しい
97	弥生土器　壺底部		①淡赤褐色 ②淡黄灰色	2～3mmの砂粒を多量に含む	P.D.6中上部	風化が激しい
98	土師器　壺底部		①赤褐色 ②淡褐色	精製粘土に2～3mmの砂粒を含む	東溝状遺構第15トレンチ包含層中S46.10.21	
99	ミニュチュア　高坏		①黒色 ②淡灰褐色	1～2mmの砂粒を含む		蓋の可能性あり

番号	器　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	孔　径（cm）	重　量（g）	備　考
溝状遺構（Fig.84）							
77	土錘	(4.5)	1.4	1.4	0.25	(9.44)	精良な胎土
78	土錘	4.2	1.9	1.9	0.35	13.37	精良な胎土

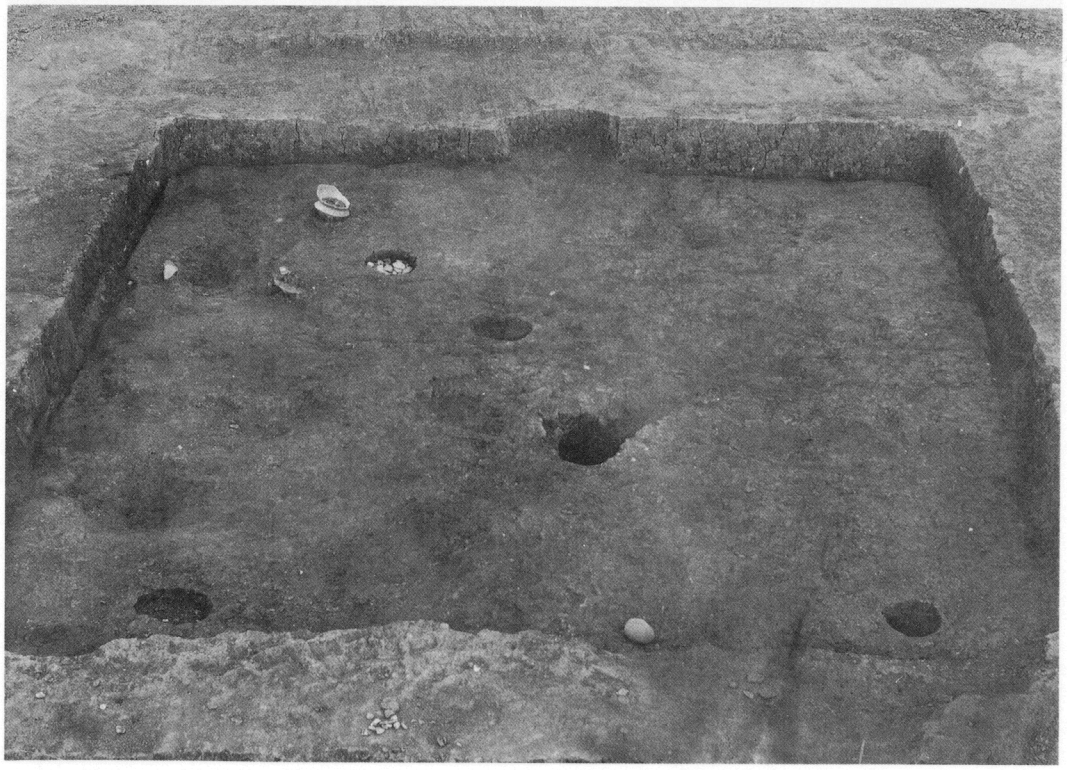
番号	器　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	備　考
第2号住居跡（Fig.72）						
8	耕具刃先				37.03	
第4号住居跡（Fig.75）						
17	鉄鎌	(10.0)	2.0	2.5	32.39	

吉田遺跡第Ⅰ地区E区の調査

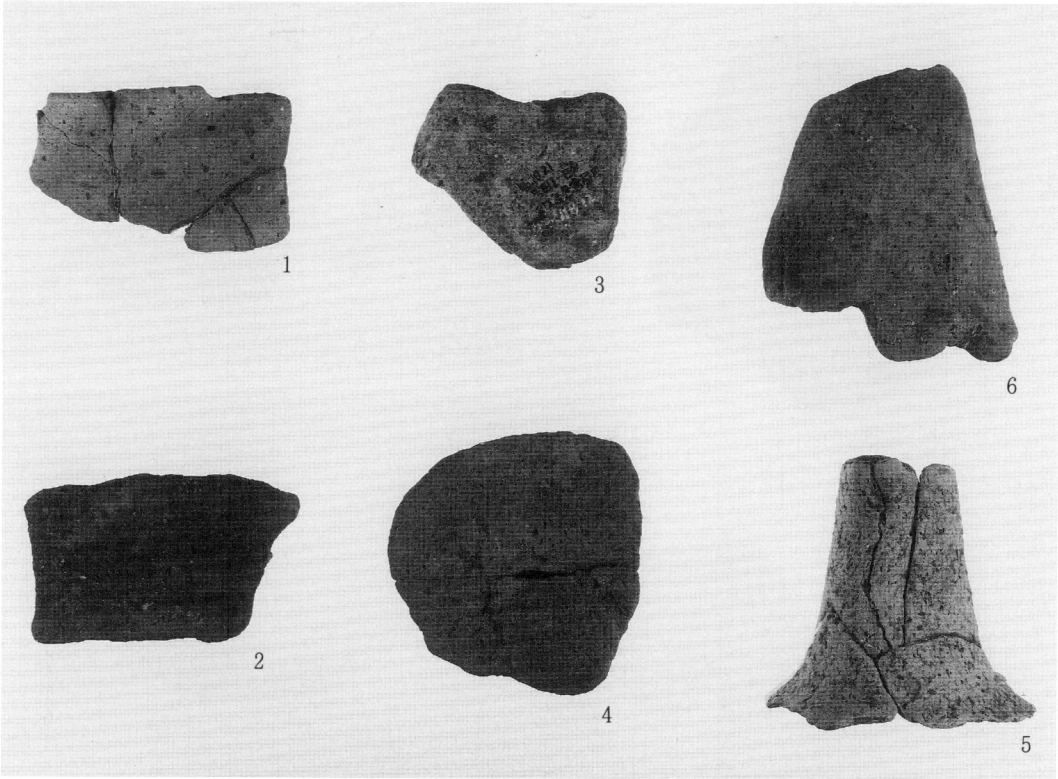
法量（　）は復元値

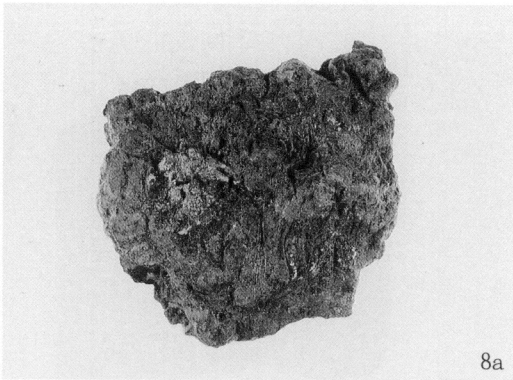
番号	器　　種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重　量（g）	石　　質	備　　考
第2号竪穴住居跡（Fig.72）							
7	すり石	10.6	8.5	5.2	660.6	サヌカイト	両端部に敲打面をもつ
溝状遺構（Fig.85）							
79	砥石	(5.9)	(5.1)	5.3	246.52	凝灰岩	
遺構に伴わない遺物（Fig.87･88）							
100	石鏃	2.3	(2.1)	0.5	1.53	姫島産黒曜石	
101	石鏃	2.3	1.85	0.5	1.25	姫島産黒曜石	
102	石鏃	(1.5)	(1.35)	0.45	0.55	サヌカイト	
103	石鏃	(1.2)	(1.05)	(0.2)	0.21	サヌカイト	
104	石鏃	2.7	(1.8)	0.5	1.74	サヌカイト	
105	石鏃	(1.0)	1.7	0.3	0.48	サヌカイト	
106	石鏃	(1.6)	1.35	0.3	0.67	サヌカイト	
107	石鏃	(2.5)	1.35	0.35	1.32	結晶片岩	
108	石鏃	(2.7)	(1.45)	0.4	1.82	サヌカイト	
109	石鏃	(3.4)	1.3	0.6	2.04	サヌカイト	
110	石鏃	4.6	2.75	0.75	9.08	サヌカイト	
111	石鏃	(1.8)	(1.5)	0.2	0.64	サヌカイト	
112	石鏃	(1.8)	(1.55)	0.35	1.02	サヌカイト	
113	石鏃	(1.7)	(1.25)	0.3	0.50	サヌカイト	
114	扁平片刃石斧	3.6	2.25	0.95	14.52	泥岩	
115	太形蛤刃石斧	(4.85)	(4.35)	(3.25)	120.76	ひん岩	
116	砥石	6.7	5.5	2.95	144.06	結晶片岩	
117	焼成を受けた石	(10.2)	(7.5)	(3.15)	289.11	デイサイト	面をもち焼成を受ける
118	線刻をもつ石	8.35	4.2	1.6	86.76	安山岩	片面に線刻をもつ

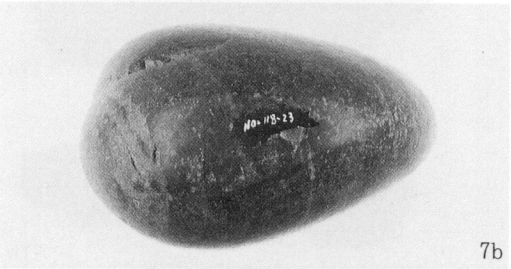
(1) 調査前全景（西から）

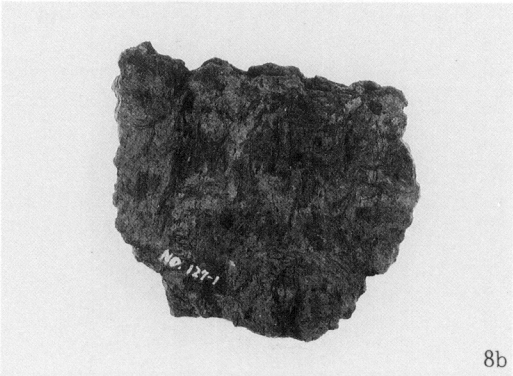


(2) 第2号竪穴住居跡（西から）

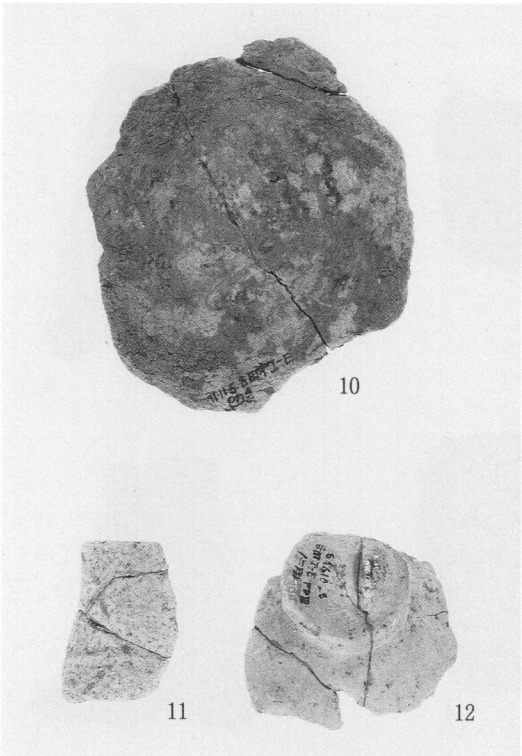


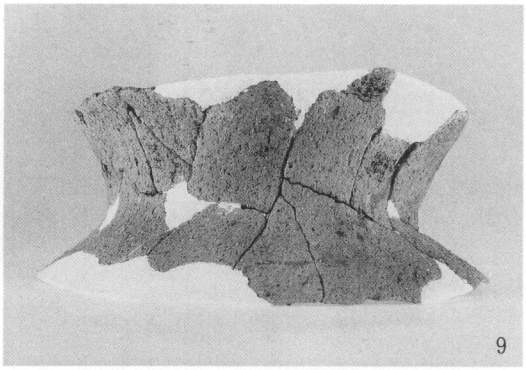




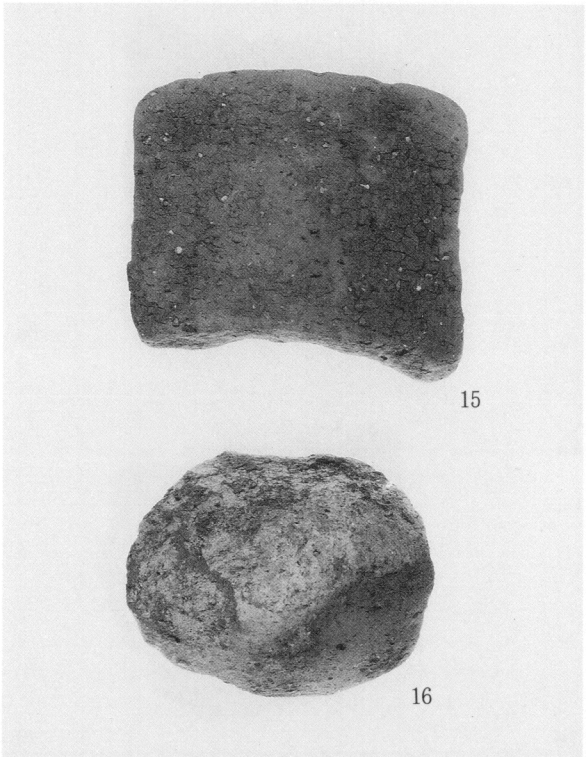


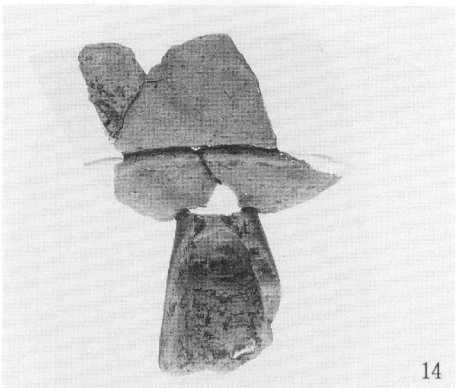
第１・２号竪穴住居跡出土遺物

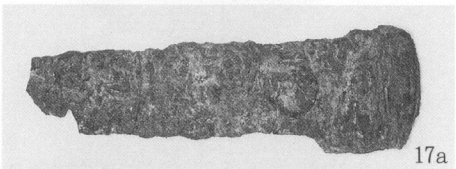


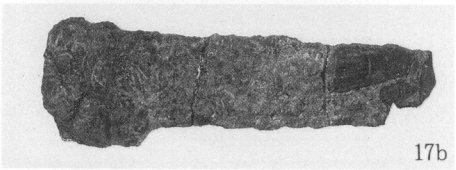


(1) 第3号竪穴住居跡出土遺物

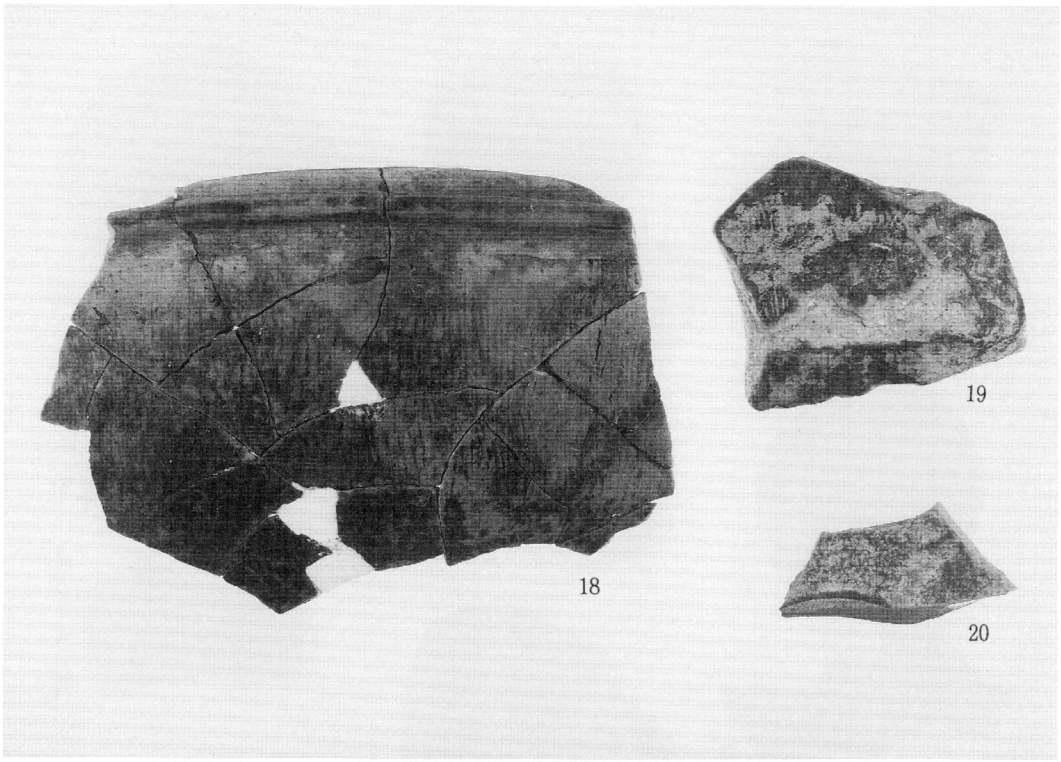




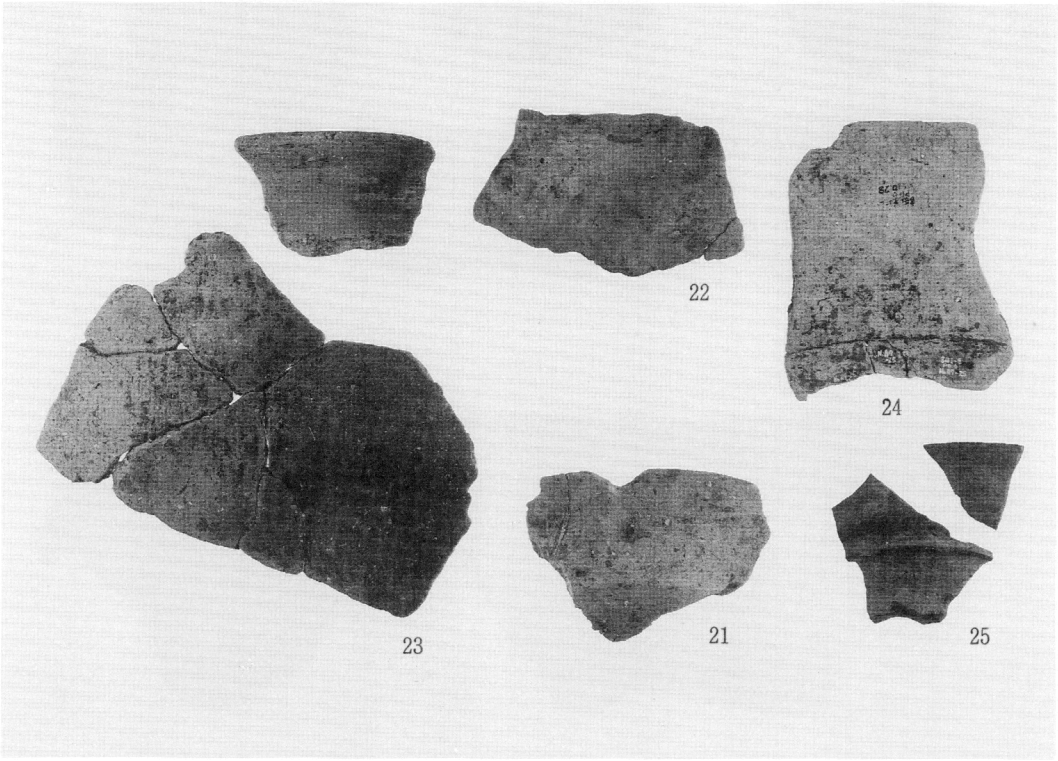




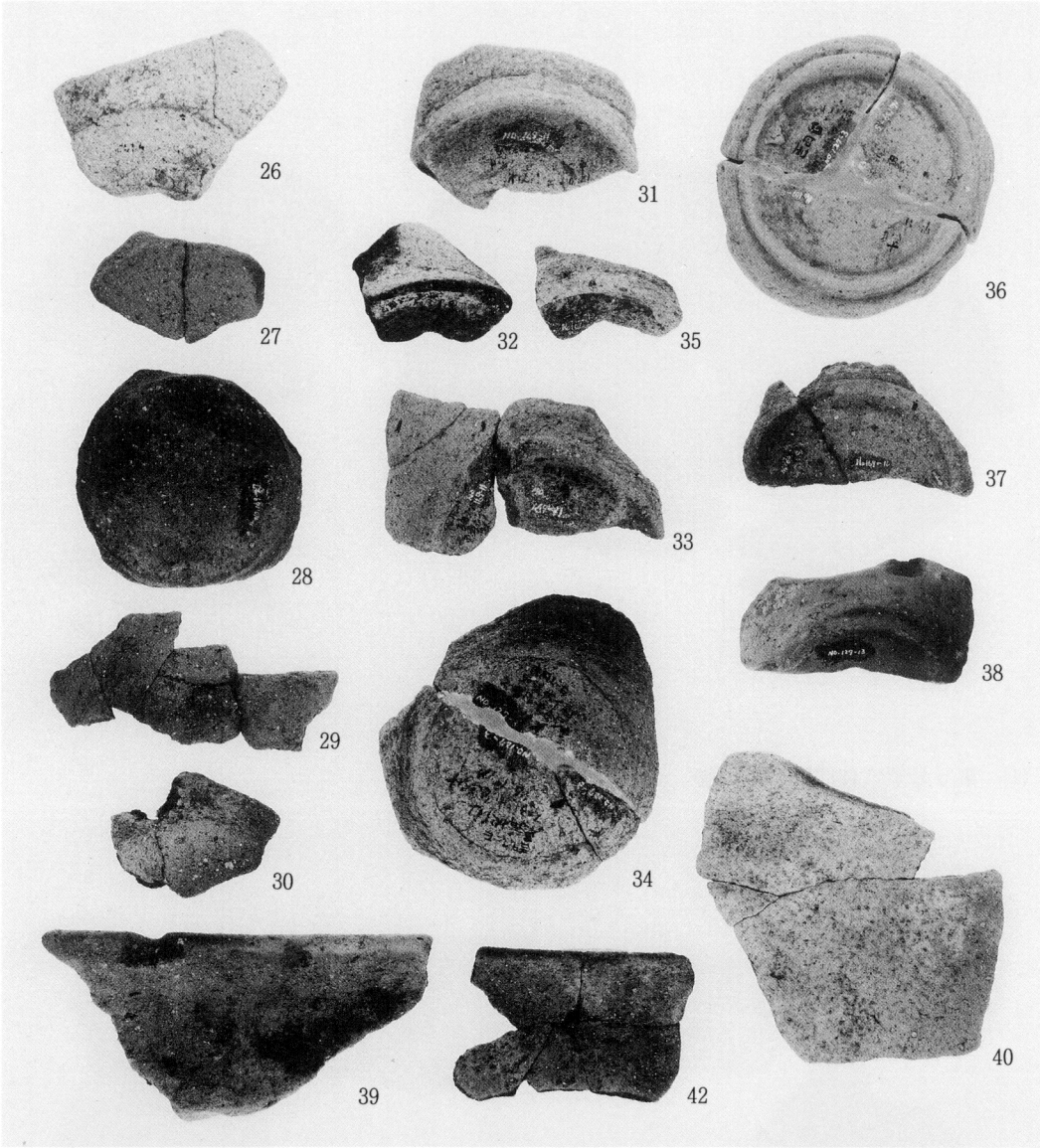
(2) 第4号竪穴住居跡出土遺物

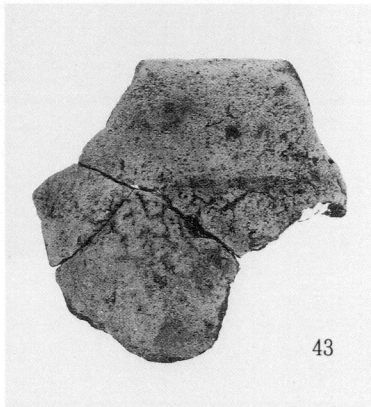


(1) 第5号竪穴住居跡出土遺物

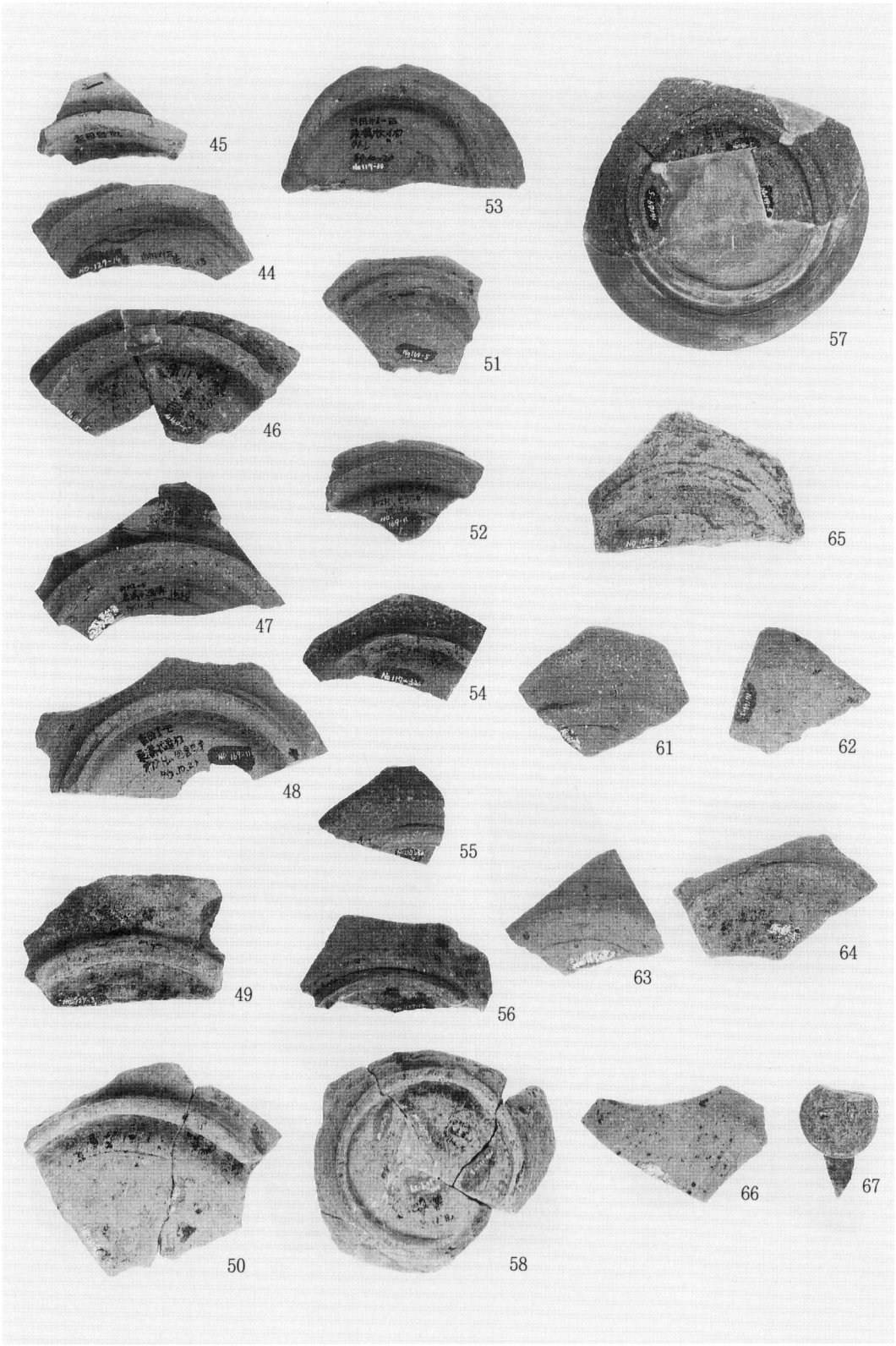


(2) 第6号竪穴住居跡出土遺物



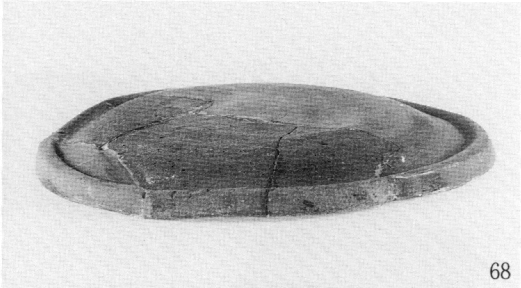


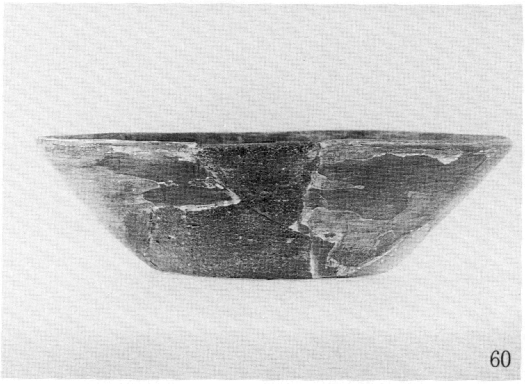
溝状遺構出土遺物(1)

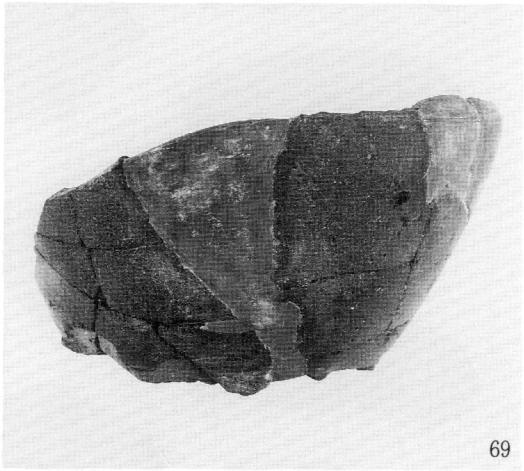


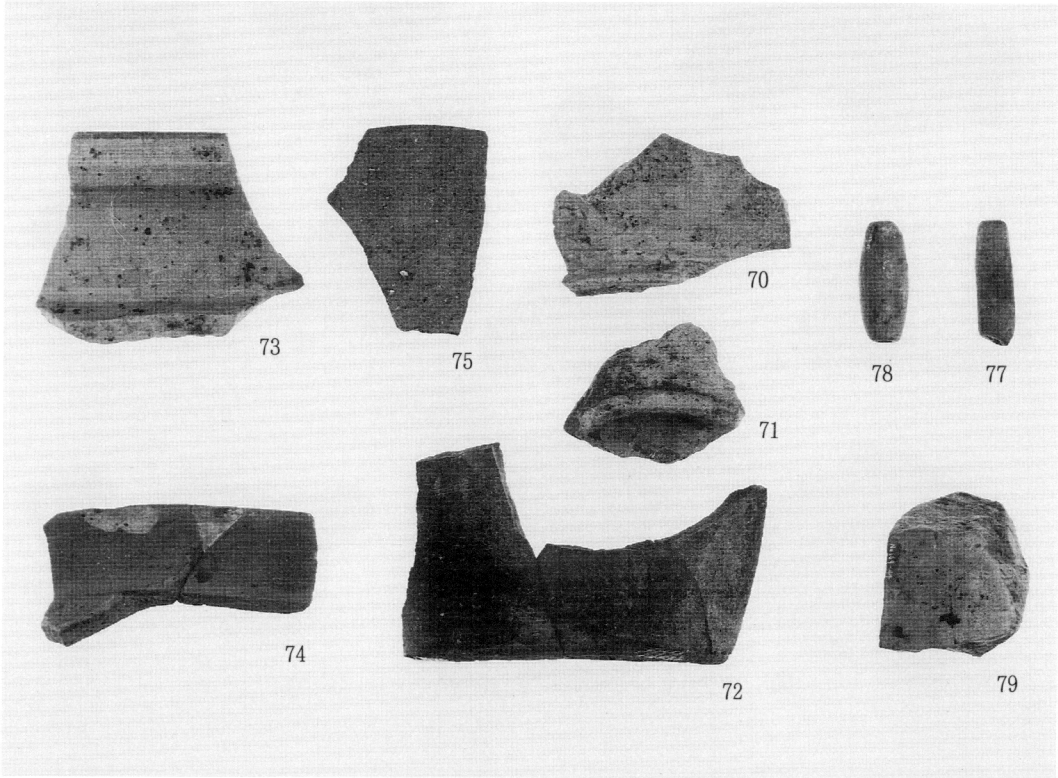
溝状遺構出土遺物(2)

59

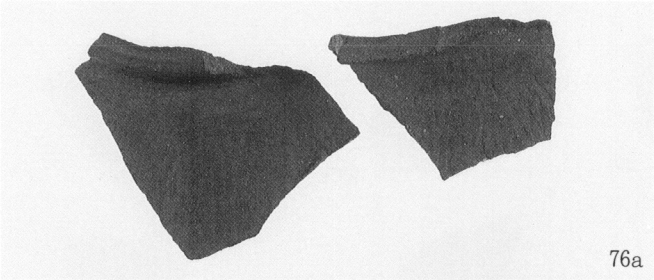

68


60

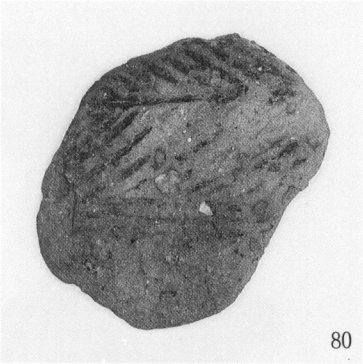

69



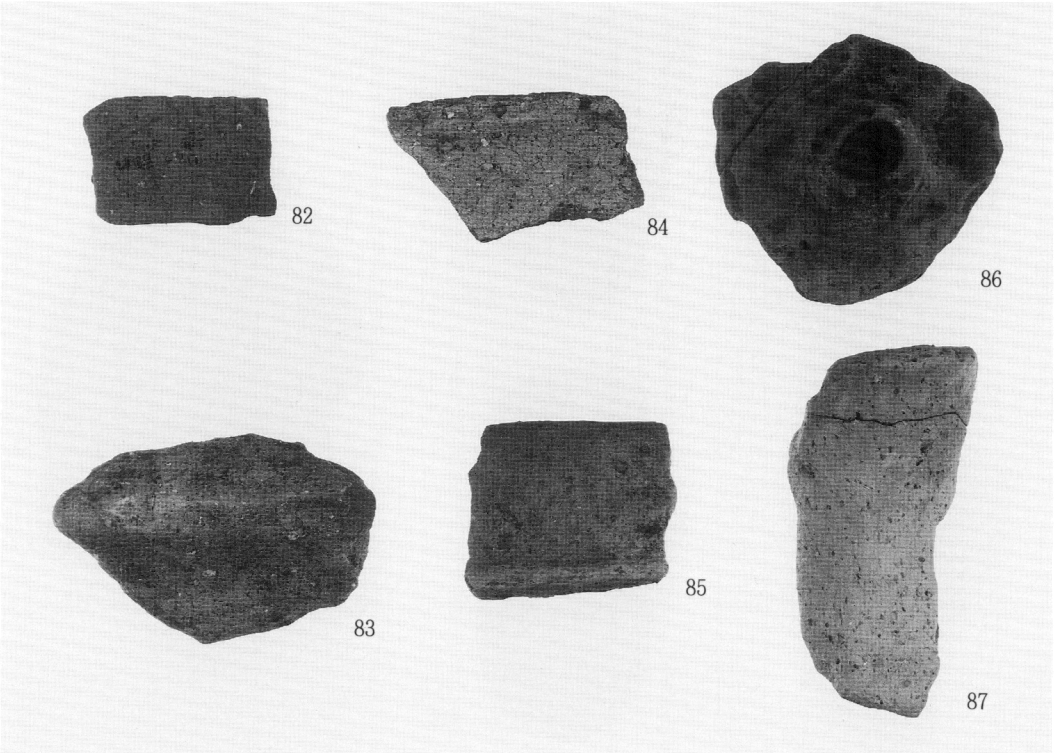
溝状遺構出土遺物(3)



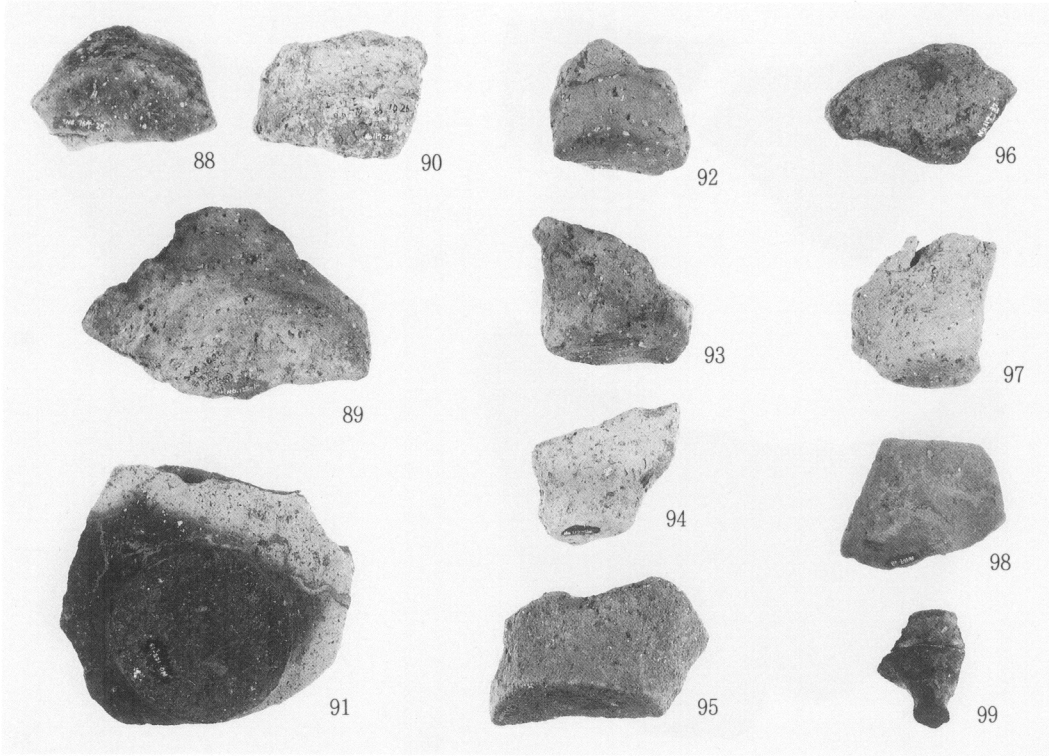
(1) 溝状遺構出土遺物(4)



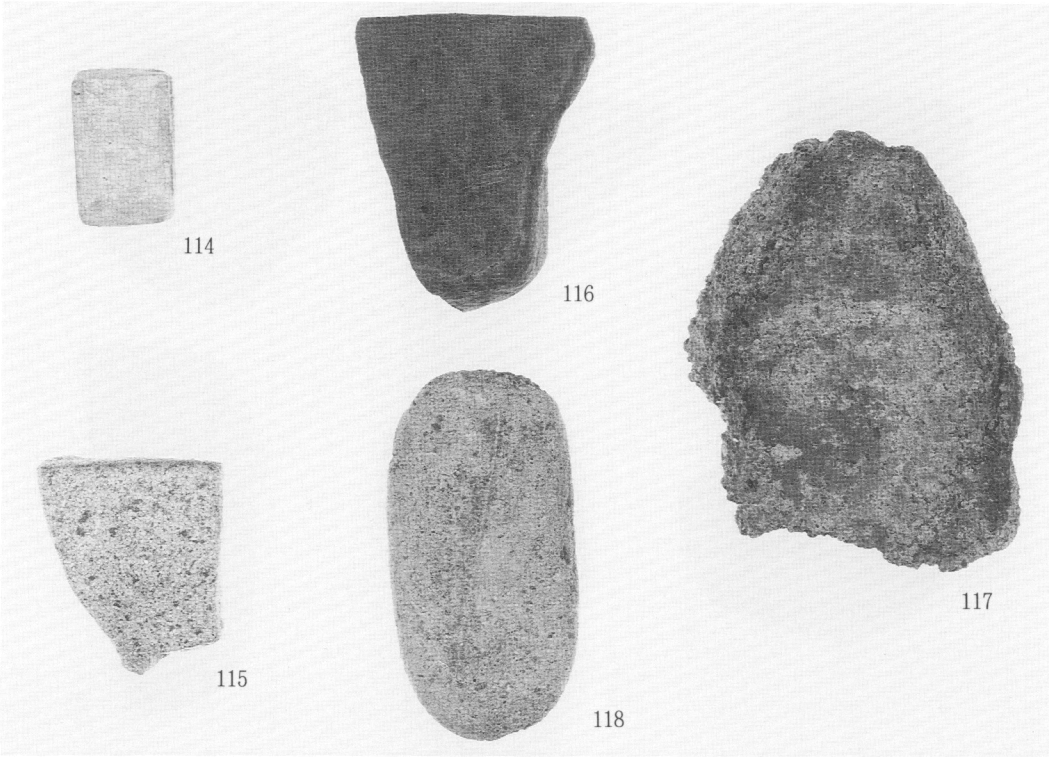
(2) 遺構に伴わない前期弥生土器



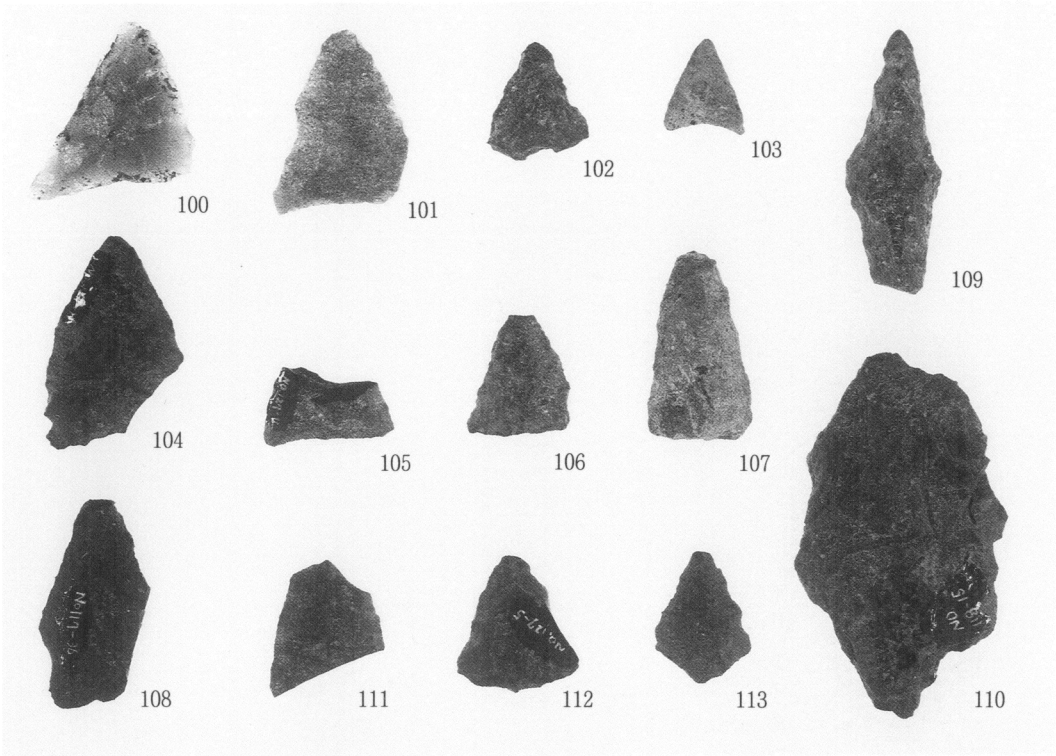
(3) 遺構に伴わない土器



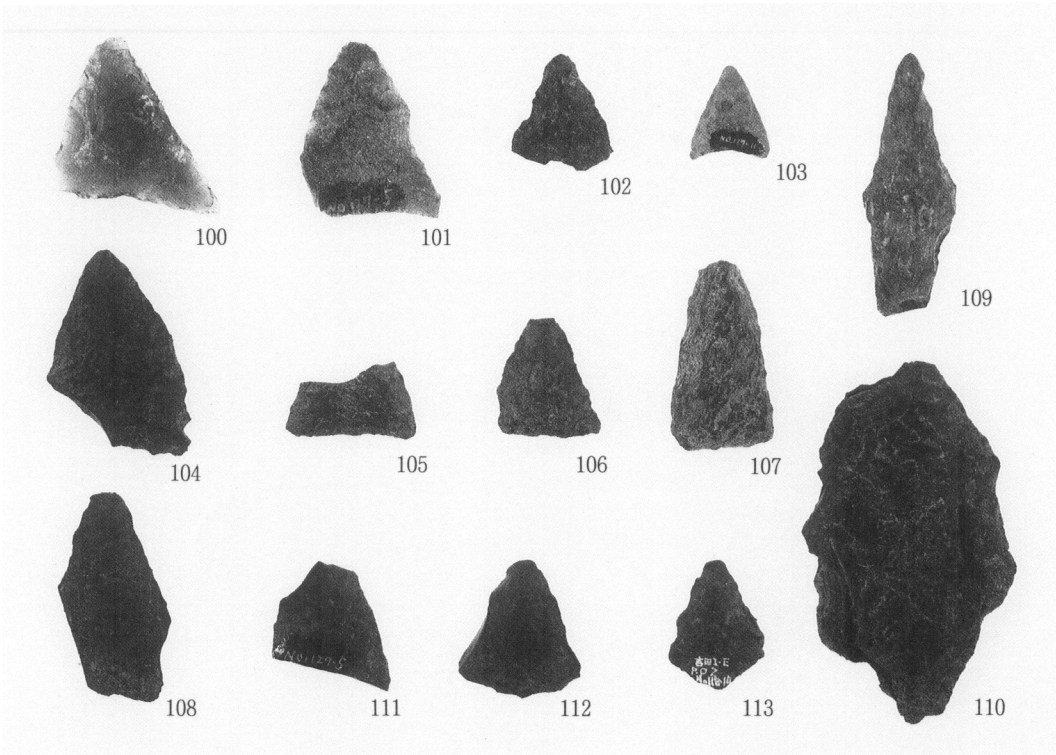
(1) 遺構に伴わない土器底部



(2) 遺構に伴わない石器



（表）



遺構に伴わない石鏃

（裏）